View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

第一工業大学研究報告
第27号(2015)pp.113-132

邪馬壹国と近隣のくにぐにの比定

棚　田　嘉　博

第一工業大学　工学部　〒899-4395鹿児島県霧島市国分中央1-10-2
E-mail:y-tanada@daiichi-koudai.ac.jp

Identifications of Kingdom Xiemayi and Its Neighboring Provinces

Yoshihiro TANADA

Faculty of Engineering, Daiichi Institute of Technology

1-10-2 Kokubu-Chuo, Kirishima City, Kagoshima 899-4395, Japan

United Kingdoms of Wa and the suzerain Kingdom Xiemayi in the ancient Japan were described with their politics, peoples and customs in the Records of Wei Dynasty in the ancient China. The locations of the provinces in the Kingdoms have not been identified except several ones till now.

This article identifies almost the locations of Kingdom Xiemayi and the neighboring provinces. Referring to place-names in the Encyclopedia Wamyosho, the provinces of Wa in the Records of Wei Dynasty are identified as such that 'Fumi-Koku' in Chinese means 'Fukamizo-No-Kuni' in Japanese. Kingdom Xiemayi so-called 'Yamaichi-Koku' is identified as present Saitobaru, is named comparing to General Sima Yi of Wei by the author Cheng Shou, may be 'Kuzumaitsu-No-Kuni' in Japanese, and is renamed later as 'Yamato-No-Kuni' by its king. From Chinese and Japanese historical records, it is presumed that the Qin Kingdom as 'Toyo-No-Kuni' leads 'Jinmu' from 'Kunu-Koku' of present Kagoshima Prefecture to found Kinki Dynasty and moves into the dynasty along with Yamato-No-Kuni to establish 'Nippon'.

Key Words : *General Sima Yi, Kingdom Xiemayi, Yamato, Queen Himika, Records of Wei Dynasty.*

1.　はじめに

三国志は西晋の陳寿が著わした史書であって、魏志、蜀志、呉志に分かれ、特に、魏志の東夷伝の中の倭人伝は当時の我が国に関して貴重な記述があり[1)]、通称、魏志倭人伝と呼ばれている。そこでは、邪馬壹国と約３０のくにぐにの名称が表れ、政治、風俗、集落が記されている。邪馬壹國の表記は原著にあったが、新井白石、本居宣長以来、壹は臺(台)の間違いとして、邪馬台国(國)と表記され「やまたいこく」訓読みされてきた[2)]。古田武彦は三国志６５巻などを詳しく調べ、邪馬壹国と表記すべきであることを主張し[3)]、最近ではこの表記が普及している。本論はこの表記を採用する。

邪馬壹国の表記の進展にもかかわらず、その位置は九州、近畿など諸説紛粉の状況で、定まっていなかった。邪馬壹国と約３０のくにぐにには中国側が付けた名称であるので、その名前のままのくにが倭の国に在ったとは考えられない。たとえば、現代では、アメリカ合衆国は中国語では美国、日本語では米国、フランス、ドイツは中国語、日本語で佛国、独国と音の一部を漢字に当てて表記する。そのほか、マクドナルドは麦当労、オリンピックは奥林匹克と中国語で表記し、漢字の発音が分からないと、本来の名前と対応できない。そこで、日本の古代の地名は大きく変化しないという前提で、平安時代の９３１年から９３８年に源順（みなもとのしたごう）によって編纂された和名類聚抄[4)]、通称、和名抄にある地名と魏志倭人伝のくにぐにとの対応を試みる。そこでは、主に、万葉仮名[5)]、呉音[6)]の読みを参考にする。さらに、倭人伝に記された距離は１里を７６ｍとする短離[3)]で考える。

本論では、このような条件の下に、魏志倭人伝のくにぐにの比定を試みる。考察により、陳寿の的確な表現と

思い、渡来人の穏語が潜んでいることが判明する。そして、倭国のほとんどのくにぐにの位置および、読みを推定することができる。そして、その後の中国と日本の歴史書を考察することにより、倭国から日本国に統一される過程を推定する。

2.　倭人の言葉の漢字表記

2.1 漢音と呉音

中国は古来より多くの民族が流入、移動し、中国語の発音は子音、母音に加えて四声[6]は日本人に発音が難しく、中国本土でも地域、時代によって違う。言葉が異なるのは人類の営みの道理であり、日本、朝鮮の古代の言葉と発音も現代に再現することは難しい。本論で先ず対象とするのは、中国の魏、呉、蜀の三国時代と日本の邪馬壹国の時代である。倭国は漢の時代から中国の王朝に朝貢し、倭国の指導者は漢字の意味、読みに知識があったと考えられる。秦の時代に始皇帝の命を受けて徐福が３千人の若い男女と技術者を従え、不老不死の薬を求めて東海の三神山に向かい、そのまま帰らなかったと史記と漢書にあり[6]、また、倭人は呉の太白の末裔であると称していたと魏略にある[7]。古くから渡来人が言葉や技術を携えて倭国に移住し、稲作などの技術を普及させ、くにぐにを指導してきたと考えられる。

当時の中国語の発音は呉音である。隋、唐の時代に呉音の鼻音が非鼻音化して漢音が使われ、倭国、日本国の留学生が隋、唐から持ち帰り、日本では呉音と漢音の訓みが使われるようになった[6]。現代の中国でも、呉音、漢音の両方の発音がある。現代の中国語では漢字名をローマ字表記するために、１９５８年からピンイン（拼音、pinyin ）を用いている[8]。従って、本論では、表題の邪馬壹を英文で Xiemayi と表記する[9]。

2.2 表音文字の対応

(1) 奴の読み

福岡県の志賀島で１７８４年に発見された金印に漢委奴國王と記され、「かんのわのなのこくおう」と読むように三宅米吉が提唱し[10]それが通説となっている。後になって、漢から見た国の名前は細切れではなくて、伊都国、怡土国を意識し、委奴を続けて「いど」読むという説がある[7]。しかし、奴の読み「ド」は漢音で、「ヌ」が呉音である[9]。黄當時は、委奴を「わぬ」と読み、委は倭の略字で「ぬ」は大きいという意味の後置修飾語であり、委奴は「おおきな倭、偉大なる倭」、のちの前置修飾表現の「大倭、大和」であると説いている[11]。現在でも「のぶとい声」に大きい声という意味がある。筆者はこの説に同意して、奴を「ぬ」と読み、現代の「な」、「ぬ」、「の」に対応する倭人の言葉の音を表したものとする。

(2) 馬の読み

魏志倭人伝には、その地には牛、馬、虎、豹、羊、鵲なし、とある。馬の呉音は「マ」、「メ」であり、のちに派生した漢音では「バ」である[9]。家畜の馬は後になって倭国に輸入され、倭人は呉音の「m」が発音しにくく、「むま」と発音し、現在の「うま」の発音につながったとされている[12]。魏志倭人伝では馬を倭人の「ま」の発音を表すものとする。万葉仮名にも馬が「ま」の代わり使われている。

三国志演義で知られているように、蜀の諸葛孔明と戦った魏の司馬懿は現在の日本では「シバイ」と呼ぶが、呉音では「シマイ」、拼音では「Sima Yi 」である[9]。司馬懿は遼東の公孫淵を滅ぼし、西晋の礎を作り、彼の孫の司馬炎が魏から禅譲されて西晋を建てたとき、高祖宣帝と追尊された人である[6]。卑彌呼は公孫度の娘という説もあり[7]、倭国の指導者たちは魏に朝貢するに当たり、司馬懿を畏怖したと思われる。

(3) 邪の読み

邪馬台国を「やまたいこく」と読むのが普通である。邪馬臺（台）は後の近畿の「やまと」に近い発音として新井白石らが採用した読み方である。古事記では伊邪那岐命、伊邪那美命を「いざなぎのみこと、いざなみのみこと」のように、邪を「ざ」と読む。万葉仮名では「ざ」、邪の俗字の耶は「や」と読まれている。大修館書店の新漢語林によれば、邪は本来は地名の琅邪（ロウヤ）を表す文字で、のち、別字のジャ（衣の上に邪が入ったつくり）の代わりに用いて、ななめ・正しくないという意味を表す、とある[9]。邪は呉音で「ジャ」、漢音で「シャ」、他の音では「ヤ」である[9]。

陳寿は魏の将軍、司馬懿(Sima Yi)に敬意を払い、発音が近い邪馬壹(Xiemayi)の文字を使ったと考えられる。なぜならば、倭国のその他のくにぐにの名前を上げるとき、冒頭から斯馬国、巳百支国、伊邪国の順に並べている。斯馬は「シマ」、巳は「シ」、伊は「イ」であり、「シマイ」を示そうとしている。さらに、一大国では一(yi)の文字を使い、邪馬壹国では一と同じ意味の壹(yi)の文字を使っている。陳寿は、徐福が琅邪の出身で琅邪台（臺）(Langyatai)から見下ろせる龍湾から出航したとする史記の記述を知っていて、のちに邪馬臺(Yamatai)と誤記されることを期待していたように思われる。范曄が後漢書で邪馬臺国と書き[3]、以後、中国でもこの表現が浸透し、倭国でも中国への朝貢によって邪馬臺（やまたい）の表現と読みを知り得たと考

えられる。なお、邪は呉音で「ジャ」、馬は漢音で「バ」である [9]。中国では呉音から漢音への過渡期には邪馬壹国を略称し、邪馬「ジャバ」国と呼んだかも知れない。隋から唐の初め頃に中国を訪れた西洋人には「Jaba 」に聞こえ、それがやがて Japan に変化したとも考えられよう。日本の英語名 Japan が、日本の中国音読み「ジツポン」やマルコポーロの東方見聞録にある黄金の国ジパング(Zipangu)に由来するという説は音韻的に不利と思われる。

陳寿は、現在の「ざ」または「ず」に対応する倭人の発音を邪で表記したと考えられる。あるいは、倭国に来た使者である役人が表記したとも考えられる。後述の狗邪韓国の読みでさらに補強される。

(4) 都の読み

東京都、京都の例のように都を現在では「と」と発音することが多い。一方では宇都宮の例では「つ」と発音する。都は「みやこ」として王のいる宮殿とその地域、都会の意味があり、漢音では「ト」呉音では「ツ」で発音される [9]。従って、都で表記される二つの国である伊都国、好古都国の都は倭人の「つ」の表音を表すとともに、「みやこ」の意味を含んでいると考えられる。魏の役人が倭人からその国の歴史と実体を聞き、記録したものと考えられる。これら二つの国のほかに最も重要な女王国・邪馬壹国の壹は伊都国に由来する「いつ」を表していると考えられ、後に議論する。

(5) 支の読み

巳百支国、郡支国の二つの国に支が使われている。万葉仮名では支は「キ」の読みに使われ [5]、大漢和辞典[13] には「シ」、「キ、ギ」の読み、一方、新漢語林には「シ」の読みと拼音の「zhi」が示されている。万葉仮名の「キ」を採用すれば、後述のように和名抄の郡、郷の名が素直に当てはまる。

3.　魏使の行程

これまで魏志倭人伝は素直に解読されていないのが殆どである。近畿説では、距離を長里で考え、南は東の誤りであるとして、邪馬壹国を近畿大和方面に求め，九州説では、距離を短里で考え、方角の誤差を甘んじて邪馬壹国を中北部九州に求めている[14]。中田力は、魏使の行程を距離、方向を忠実に辿り、邪馬壹国の「みやこ」は西都原付近であると推定しているが、途中の地名を比定していない[15]。本論では、途中の地名を比定しながら、魏使の行程を辿り、同じ結論に達する。

魏志倭人伝に記述されている魏使の行程は次のようにまとめられる[1),15)]。

帯方郡から狗邪韓国までーーー水行、７千余里
狗邪韓国から対海国までーーー１海渡、千余里
対海国から一大国までーーー南、１海渡、千余里
一大国から末盧国までーーー１海渡、千余里
末盧国から伊都国までーーー東南陸行、５００里
伊都国から奴国までーーー東南行、１００里
奴国から不弥国までーーー東行、１００里
不弥国から投馬国までーーー南、水行２０日
投馬国から邪馬壹国までーー南、水行１０日、陸行１月

狗邪韓国から邪馬壹国までの途中のくにの中で狗邪韓国から末盧国までは、どの説でも共通に、対海国は対馬（つしま）、一大国は壱岐（いき）、末盧国は松浦（まつら）として認識されている。壱岐から一番近い松浦の港は呼子であって、半島を右に遠回りすれば唐津になるが、嵐やしけを避けられる天然の良港は呼子であろう。

隋書倭国伝の中で倭人は距離を知らず、日数で測った、とある[16]。魏使の一行は短距離の陸行では歩数から距離を割り出せたが、長距離の陸行では歩数を数えることが難しく、倭人と同じく陸行１月としたのであろう。船で行く水行の場合、数隻の小さな伝馬船のような船に案内人と魏使、水夫が乗り分けて、九州の有明海、不知火海を沿岸伝いに、浦々に着岸し、休養し、宿泊しながら南に進んだので日数を要したのであろう。狗邪韓国から末盧国までは大きな船（構造船）で渡ったので、船の揺れが少なく乗船中でも、島の山の高さ又は幅と遠方からの見込み角の数値から三角測量の器械で魏使は凡その距離を測ることができたと思われる。現在でも晴れた日には、狗邪韓国とされている釜山付近[15] から対馬が見えるという。

現代の地図によれば、釜山港から対馬の浅茅湾入り口まで約９０ｋｍ、対馬の浅茅湾入り口から壱岐の郷ノ浦港まで約９６ｋｍ、壱岐の郷ノ浦港から呼子港まで約３２ｋｍ、迂回して唐津港まで約４６ｋｍである。短里で１０００里は７６ｋｍ、５００里は３８ｋｍ、１００里は７．６ｋｍに相当するので、短里に換算すれば、狗邪韓国から対海国まで約１１８０里、対海国から一大国まで約１２６０里は妥当であるが、一大国から末盧国の呼子港までは約４２０里、唐津港まで６１０里は大まかである。しかしながら、狗邪韓国から末盧国まで２８６０里あるいは３０５０里は約３０００里となり、３等分して１０００里間隔とする方が、大局を把握しやすい説明になっている。方向については夜明けから日没までの太陽の動きから魏使は判断でき、案内人の倭人も明確に理解していたと考えられる。

(1) 末盧国から伊都国まで

倭国本土への上陸点を呼子をとして魏使達の経路を

追う。呼子から東南５００里の地点は現在の多久付近であり、そこに伊都国の一大率がいたと理解される。伊都国は和名抄では現在の糸島半島付近にあった怡土郡（いとのこおり）に対応すると考えられる。大国とされる伊都国[3]の領域がその付近まであったか、または、邪馬壹国が建国されて、出入国管理のための役所が置かれた伊都国の飛び地のような地域に役人、兵士とその家族らがいて戸数１０００、人口数千人程度の集落であったと考えられる。伊都国全体は戸数が万単位であったのを案内人が説明しなかったのかも知れない。伊都国は和名の「いつのくに」を記したものと考えられる。

(2) 伊都国から奴国、不弥国まで

多久付近から東南、正確には東南東１００里の地点は現在の小城付近である。小城は佐賀平野の西端であり、現在の小城、佐賀付近が戸数２万余りの大国・奴国であったと考えられる。佐賀市には現在、嘉瀬川が北から南に流れているが、古くは現在の佐賀大和（長崎自動車道佐賀大和IC）付近の川上から巨勢川を経て東に折れ、現在もある佐賀江川の流れとなって筑後川の河口付近に流れていた[17]。また、現在よりも２～３メートル海面が高かった縄文海進を経て、当時の海岸線は、佐賀平野では佐賀市与賀町付近、吉野ヶ里付近、筑後平野では大川市付近が陸地になる程度にまで後退していた[18]。和名抄の肥前国には、小城郡、佐嘉郡はあるが、「な」、「ぬ」、「の」の付く地名はない。古くは川は蛇になぞらえて「なか」、「なが」とも云われたという[19]。和名抄の筑紫国の那珂郡（なかのこほり）は「なかのくに」・奴国（ヌコク）に比定することができ、現在、博多湾まで那珂川が流れている地域である。従って、佐賀平野の奴国は川が貫流するもう一つの「なかのくに」か、または背振山脈の峠を越えて那珂川の谷へとつながった筑紫国の「なかのくに」と同じ国のどちらかと考えられる。「ひのくに」、「さかのくに」からの奴国（ヌコク）では根拠が薄い。

次に、奴国の西端から東に１００里行くと不弥国に着くと記されている。和名抄には佐嘉郡深溝郷（ふかみぞのさと）があり、現在は地名が残っていないが、肥前国府（佐賀大和IC近くの加瀬川左岸）の近くにあったとされている[20]。不弥国は奴国の中の「ふかみぞのくに」を表記したと考えられる。そこは港町でもあり商人や旅人で賑わい、戸数１０００、数千人の人達が住んでいたのであろう。また、「なかのくに」の国王の居城が近くにあって、魏使の一行は国王に歓待され、厚遇されたかもしれない。そこから、船に乗って川を下り筑後川河口付近から有明海に出て、東岸沿いを南に進んだと考えられる。

(3) 不弥国から投馬国まで

有明海は干潮時に広大な干潟が現れる海域なので、東岸沿いを船で進み、着岸、離岸するには満ち潮を狙う必要があり、日数を要したと考えられる。また、川や浅い沿岸を航行した船は、櫓や櫂でなく竿を使ったであろうから、進行速度が遅かったと考えられる。南に船で２０日かけて進み、投馬国に至ると記されている。有明海南部の東岸沿いで、大きな平野があって戸数５万余りを抱える大国は現在の熊本市付近以外に考えられないと、中田力は論じている[15]。本論では、この説に従い投馬国を推定する。

和名抄では肥後国益城郡（ましきのこほり）に當麻郷（たうまのさと）があり、国府は益城郡と記されている。その国府は現在の熊本市南区城南町陣内付近に推定され[21]、當麻郷は現在の宇城市豊野町糸石字田馬（たうま）に比定されている[22]。「たう（tau）」はポリネシア系の古代日本語で船[11]、「ま（間）」は場所[8]の意味があり、「たうま」は港の意味になる。「たうまのくに」を投馬国と表記し、呉音の「ヅマコク」に写音したと考えられる。魏使は「たう」を「トウ」として聞き、当時は呉音として「トウ」がなく、代わりの呉音「ヅ」に対して投の字を当てたと考えられる。漢音であれば投の字に「トウ」の発音があり、「たうま」が投馬の表記で「トウマ」として非常に近い発音に写されたはずである。田馬の地は現在のJR宇土駅から東南約１０ｋｍの位置に、陣内は東に約８ｋｍの位置に在る。これらの地域は浜戸川が北に流れ、緑川に注いでいるが、緑川の洪水が避けられ船が通行、停泊できる肥沃な地であったと考えられる。縄文海進の名残として、白川や緑川の河口付近は当時まだ海が広がり、宇土半島も本土と水路で隔てられ、有明海から不知火海へ船で通行できたと考えられている[15, 23]。時代を経るにつれて、海岸線が後退し、有明海や八代海の沿岸に多くの河川から土砂が流入し沖積平野と遠浅の地を形成し、人々が干拓によって平野を広げてきた。平野が広がり耕作地と共に人口が増えるにつれて、肥後国の中心地は北上し、国府が託麻郡（たくまのこほり）、飽田郡（あきたのこほり）へと遷って行ったという[21]。当時は陣内付近を中心として戸数５万余の「たうまのくに」があったと考えられる。

「ふかみぞのくに」から筑後川河口を経て南行し、緑川河口を経て「たうまのくに」に至るまで、約９０ｋｍ（約１２００里）を２０日要したので、平均して１日当たり約４．５ｋｍ（約６０里）進んだことになる。

魏使の一行はここでも「たうまのくに」の国王に歓待され、厚遇されたかもしれない。そして、緑川河口から船で水路を通って不知火海に抜け、東岸を南に進んだと考えられる。不知火海の東岸の八代付近はやはり遠浅が続くところである。

(4) 投馬国から邪馬壹国まで

倭人伝の記述の中に「女王国の東、海を渡る千余里、また国有り、皆倭種。又、侏儒国有り。その南に在り。人長３、４尺。女王を去る４千余里。」とあり、九州島より東７６ｋｍ余りに四国が在り、その南部に小人がいて、女王の都から３００ｋｍ余り（コの字型に測って）の宿毛から足摺岬あたりに住んでいたと考えられる。魏使は、女王国に到着し、滞在しているときに、実際に船で案内され、見たことを述べているのである。この記述とこれまでの行程から、女王の都が九州島東岸の大古墳群のある西都原付近に在ったことを示唆している。また女王国の南に、女王国に対抗する狗奴国があると記述されている。狗奴国は現在の鹿児島県にあったと考えられ、後に議論する。

八代海東岸の港で船を降り、歩いて１か月で西都原付近に行ったのは、どの道筋であろうか。中田力は八代から上陸し、球磨川沿いの道から人吉を経て、湯前に行き、そこから約５０ｋｍの山道を通って、西都原に行った可能性を論じている[15]。しかし、客人を案内するには、急流沿い、標高７００m近くの峠、人里のない道筋は、危険で無理がある。日本書紀の景行天皇遠征の道筋には、日向（日向市）、児湯（西都市）、夷守（小林市）、熊の郡（人吉市）を経て球磨川を下り、途中から芦北（水俣市）に至るものがある[24]。この場合は現在のえびの市から加久藤の急峻な峠を越えて人吉に降りたことを示しており、この道筋も無理である。山道がなだらかで人里があるのは、水俣市から久木野川、山野川沿いを伊佐市に抜ける旧 JR 山野線の道筋であり[25]、それ以後は、川内川沿いを通り、えびの市、小林市を経て、西都市に至る道筋が無難と考えられる。後述するが、狗奴国の主要域は現在の大隅半島の志布志湾付近にあって、現在の伊佐市付近は狗奴国の勢力が及んでいない領域であったと考えられる。

水俣は和名抄では肥後国芦北郡（あしきたのこほり）の水俣郷（みなまたのさと）に該当する。魏使は、到着した地名を質問し、案内する倭人が答えた「みなまたのくに」の発音から弥奴国と表記したと考えられる。また、南隣のくにの地名を質問し、倭人の「いずみのくに」の発音を伊邪国と表記したと考えられる。和名抄では薩摩国出水郡（いずみのこほり）が現在の鹿児島県出水市に該当する。日向国から分かれて薩摩国の前身の唱更国（しょうこうこく）が７０２年に、大隅国が７１３年に建国され、肥後国と豊前国からそれぞれ約５０００人の農民がこれらの国に移住させられたので、肥後や豊前の地名も移入されたが[26, 27]、出水地方は薩摩の国でもこの頃は稲作が進んだ地域で住民の移住も地名の移入も生じていなかったと考えられる。芦北郡も出水郡も同じ不知火海に面していて住人は親しい関係にあったと思われる。倭人伝の記述から、芦北地方、出水地方は邪馬壹国の領域であった解釈される。球磨地方、伊佐地方から女王都への道筋は邪馬壹国の領域であったと考えられよう。

「たうまのくに」から「みなまたのくに」まで約７０ｋｍ、短里では約９００里の距離を１０日間で、１日当たり約７ｋｍ進んだことになる。「ふかみぞのくに」から「たうまのくに」の約１．５倍の船足であるが、八代を過ぎてからは遠浅の海岸が減り、竿を櫂または櫓に代えて船を進めたのであろう。現在のグーグル地図の航空写真で有明海と八代海の沿岸を見れば、海の色からその深さの違いが推定できよう。帯方郡から邪馬壹国の「みなまたのくに」まで約１２８００里となり、一大国から末盧国までの過大分の約５００里を差し引けば約１２３００里となって１万２千余里の記述は妥当である。「みなまたのくに」から女王の都まで約１２０ｋｍ（約１６００里）あり、この間を１か月かけて宿泊しながら徒歩で進んだので、１日当たり約４ｋｍ（約５０里）を歩いたことになる。倭人伝では末盧国に上陸して「草木茂盛し、行くに前人見ず。」と表現しており、陸行は獣や敵を警戒し足回りに注意を払いながらで歩みは遅かったであろう。あるいは、処によっては魏使を籠に乗せて進んだかもしれない。邪馬壹国の国名と女王の都の地に関する議論は幾つかの証左を示して後に行う。

4.　くにぐにの比定

4.1 倭人伝の国名

魏使の行程に現れた国は以下の９か国、

狗邪韓国、対海国、一大国、末盧国、伊都国、奴国、
不弥国、投馬国、邪馬壹国

であり、和名抄の郡（こほり）と郷（さと）が混在している。従って、本論ではくにぐにと表現し、倭国での名前と場所を比定するときに国か集落が明らかになる。倭人伝に女王国より北の国として列挙されたのは以下の２１か国である。

斯馬国、巳百支国、伊邪国、郡支国、弥奴国、
好古都国、不呼国、姐奴国、対蘇国、蘇奴国
呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、為吾国、鬼奴国
邪馬国、躬臣国、巴利国、支惟国、烏奴国、奴国

女王国の南に敵対する

狗奴国

があると記している。全部で３１か国になる。

２１か国は音韻を踏むか意味を持たせるように、陳寿の思いが現れていると思われる。冒頭の３国の並び

からの斯馬・伊（シマイ、simayi）は、先述のように司馬懿(Sima Yi）に敬意を払い、さらに司馬懿になぞらえて倭国の略称を邪馬壹(Xiemayi)国としたことが伺える。その他の並びは、筆者には漢文の素養が足りないので、陳寿の思いが通じない。

倭人は海の民として行動範囲が広く、朝鮮半島、中国大陸、ポリネシア、ひいては縄文時代に遡っても中米のエクアドルまで行き来していたようで[28]、船が使え稲作に有利な海岸や大河沿いに「くに」の領域を持っていたと考えられる。倭人伝には「また、裸国・黒歯国有り。また、其の東南に在り。船行一年にして至るべし。」と記されている。さらに、「倭地を参問するに、海中洲島の上に絶在し、或るは絶え或るは連なること、周旋五千余里なるべし。」と記されている。九州島の主要部は東西約１４０ｋｍ、南北約３００ｋｍで計４４０ｋｍは周旋５千余里（４００ｋｍ余り）を指し、倭国が九州島を含むことを裏付けている。従って、和名抄の九州の郡、郷で水沿いの地名を参照して、倭人伝の国名を探る。

4.2 くにぐにの名称と位置

(1) 斯馬国

博多湾の西端にある糸島半島が、和名抄の筑前国志摩郡（しまのこほり）を指しており、そこを和名の「しまのくに」とする。「しまのくに」を斯馬国と表記し、「シマコク」に写音したと考えられる。斯馬は呉音で「シマ」と読む。斯は「これ」の意味で、次に示す国に対する起点を表していると思われる。糸島半島は当時、島であって対岸の大国・伊都国に面していた。

(2) 巳百支国

和名抄の筑後国竹野郡（たかのこほり）の柴刈郷（しばかりのさと）とする。現在の久留米市の筑後川沿いの田主丸町八幡に柴刈小学校がある。「しばか」を巳百支と書いて「シヒャキ」に写音し、「しばかりのくに」を巳百支国で表記したと考えられる。巳は「シ」と読み、干支の巳、蛇を表し、「しまのくに」から見れば南東に当たり、蛇すなわち川に沿っていることを意味していると考えられる。百は「ヒャク」の音を借り、小さな川が沢山ある意味も添えたと考えられる。巳百でも「しばか」の音を写せるが、支「キ」を追加して、筑後川の河口からみれば奥の端にあることを表したと考えられる。

(3) 郡支国

和名抄の豊後国国埼郡（くにさきのこほり）とする。現在の大分県の国東半島付近である。「くにさきのくに」を郡支国で表し「グンキコク」に写音したと考えられる。郡には「くに」の意味があり、支には端の意味があって、後に論じる或る大国の先にあることを表したと考えられる。

(4) 烏奴国

和名抄の筑前国宗像郡(むなかたのこほり)とする。現在の福岡県宗像市付近である。「むな」を烏奴で表し「ウヌ」に写音し、「むなかたのくに」を烏奴国で表記したと考えられる。海人（あま）族が早くから住み着き、宗像大社、大島、沖ノ島を古代から崇めてきた国である。後年、宗像の君・徳善は娘の尼子姫を天武天皇に嫁がせている[29]。宗像市の遺跡から銅製の鏡や武器などが出土し、「むなかたのくに」があったことを裏付けている[30]。

(5) 不呼国

和名抄の筑前国宗像郡（むなかたのこほり）の深田郷（ふかたのさと）とする。現在、宗像大社がある田島地区と北に隣接する深田地区を含む領域と考えられる。田島の地名は和名抄にはなく、後年にできた地名と思われる。深田は大島、沖ノ島に渡る港がある神聖な地域である。沖ノ島の沖津宮に田心（たごり）姫、大島の中津宮に湍津（たぎつ）姫、田島の辺津宮に市杵島（いちきしま）姫が祭られている。沖ノ島は女人禁制の島で、海の正倉院といわれ宝物が古代から奉納された島である[31]。「ふかた」の「ふか」を不呼で表し、「フカ」に写音し、「ふかたのくに」を不呼国で表記したと考えられる。

(6) 姐奴国

和名抄の肥後国山本郡（やまもとのこほり）佐野郷（さののさと）とする。玉名市の菊池川左岸への支流木葉川沿いの稲佐付近かと思われる[32]。「さの」を姐奴で表して「シャヌ」に写音し、「さののくに」を姐奴国で表記したと考えられる。魏使の一行が船で南に進むとき、寄港、宿泊し、記憶にとどめた集落と思われる。当時の玉名付近は現在の JR 玉名駅近くまで海岸線があったと考えられる。

(7) 対蘇国

和名抄の肥前国養父郡（やぶのこほり）鳥栖郷（とすのさと）とする。「とす」を対蘇で表して「ツイス」に写音し、「とすのくに」を対蘇国で表記したと考えられる。鳥栖は筑後川を挟んで対岸の久留米とともに古来から稲作が進んだ地域である。

(8) 蘇奴国

和名抄の肥前国彼杵郡（そのぎのこほり）とする。「その」を蘇奴で表して「ソヌ」に写音し、「そのぎのくに」を蘇奴国で表記したと考えられる。長崎県の長崎市、大村市を含む領域である[32]。

(9) 呼邑国

和名抄の筑前国糟屋郡（かすやのこほり）とする。「かや」を呼邑で表して「カオウ」に写音し、「かすやのくに」を呼邑国で表記したと考えられる。宗像郡の南に隣接した旧糟屋郡であって、現在の福岡市東区、古賀市の領域である[32]。

(10) 華奴蘇奴国

和名抄の肥前国神崎郡（かむさきのこほり）付近とする。和名抄には郷名はないが遺跡がある吉野ヶ里の「よしののさと」を中心部として、「かむさきよしの」から「かむさの」を華奴蘇奴で表して「カヌサヌ」に写音し、「かむさきよしののくに」を華奴蘇奴国で表記したと考えられる。当時は「よしののくに」があったのが、滅びて消えたか、または奈良、平安時代の政権の都合により改名され和名抄に見えないのかもしれない。その後、地域の人々が吉野の地名を復活させたと考えることができる。

(11) 鬼国

和名抄の肥前国杵島郡（きしまのこほり）とする。和名抄の肥前国小城郡（おぎのこほり）の南に接する郡である。「きしま」の「き」を鬼で表して「キ」に写音し、「きしまのくに」を鬼国で表記したと考えられる[32]。

(12) 為吾国

和名抄の筑前国遠賀郡（おんがのこほり）とする。和名抄の筑前国宗像郡の東に接する郡である。「おんが」を為吾で表して「ヰゴ」に写音し、「おんがのくに」を為吾国で表記したと考えられる。遠賀川左岸の岡垣町から洞海湾を囲む北九州市の折尾、若松、八幡、戸畑地区の領域である。洞海湾は古代に岡之水門とよばれ、神武が東征のとき滞在した岡田宮[33]は湾奥の黒崎にある。

(13) 鬼奴国

和名抄の豊前国企救郡（きくのこほり）を指し、中心部を長野郷（ながののさと）とする。「きく」の「き」と「ながの」の「な」からの「きな」を鬼奴で表して「キヌ」に写音し、「きくながののくに」を鬼奴国で表記したと考えられる。長野は周防灘側の東九州道小倉東 IC 付近にある地域である。鬼国と区別するために中心部の長野を加えて表したと考えられる。

(14) 邪馬国

和名抄の筑後国三潴郡（みずまのこほり）とする。「ずま」を邪馬で表して「ジャマ」に写音し、「みずまのくに」を邪馬国で表記したと考えられる。現在の大川市から久留米市南部に当たる地域で西鉄三潴駅とその周辺が郡名を残している。湿地帯で水沼から生じた地名と考えられる。古代から稲作が進んだ筑後平野の穀倉地帯である。

(15) 躬臣国

和名抄の筑前国御笠郡（みくゎさのこほり）とする。「くゎさ」を躬臣で表して「クウシン」に写音し、「みくゎさのくに」を躬臣国で表記したと考えられる。後に都府楼が置かれ、下って大宰府が置かれた国である[34]。春日市、筑紫野市、大野城市もこの国に含まれる。春日市の須久岡本遺跡からは銅製の鏡、武器、ガラスの勾玉など多数出土している[35]。

(16) 巴利国

和名抄の筑後国御原郡（みはらのこほり）とする。「はら」を巴利で表して「ハリ」に写音し、「みはらのくに」を巴利国で表記したと考えられる。現在、筑後川を挟んで久留米市の北にある大刀洗町付近に当たる。

(17) 支惟国

和名抄の肥前国基肆郡（きいのこほり）とする。「きい」を支惟で表して「キイ」に写音し、「きいのくに」を支惟国で表記したと考えられる。現在の鳥栖市基山町付近である。基山の山頂付近には、基肆城の土塁が残されており、後の倭国政権が白村江の戦いを前にして築いたという説がある[34]。

(18) 奴国

佐賀平野の奴国との関係が不明であるが、もう一つの奴国は和名抄の筑前国那珂郡（なかのこほり）とする。「なか」の「な」を奴で表して「ヌ」に写音し、「なかのくに」を奴国で表記したと考えられる。博多湾に注ぐ那珂川を取り巻く地域である。前述のように、近くの春日市には奴国（なこく）の丘の歴史資料館そばに須久岡本遺跡がある。

(19) 伊都国

魏使が一大率から入国手続きを受けた伊都国の本国は、和名抄の筑前国怡土郡（いとのこほり）および筑

前国早良郡（さわらのこほり）を「いつのくに」の領域とする。「いつのくに」は大国とされるので[3), 7)]、倭人伝の国名として挙げられていない東隣の早良郡の領域も含んでいたと見做す。「いつ」を伊都で表して「イツ」に写音し、「いつのくに」を伊都国で表記したと考えられる。早良郡の領域には額田郷（ぬかたのさと）、平群郷（へぐりのさと）が見られ、万葉歌人の額田王とこの地域との関係が伺われる[36)]。

(20) 末盧国

和名抄の肥前国松浦郡（まつらのこほり）とする。「まつら」を末盧で表して「マツロ」に写音し、「まつらのくに」を末盧国で表記したと考えられる。現在の佐賀県唐津市、伊万里市、長崎県佐世保市、平戸市を含む領域である。

(21) 対海国

和名抄の対馬島上縣郡（かみあがたのこほり）と対馬島下縣郡（しもあがたのこほり）である。上縣郡に賀志郷（かしのさと）、下縣郡に伊奈郷（いなのさと）があり、「つしま」の「つ」を対で表し、「かしのくに」と「いなのくに」からの「かい」を海で表して「ツイカイ」に写音し、「つしま」の「かしのくに」と「いなのくに」を対海国で表記したと考えられる。対に並んだ島、対馬が大海中にある意味を表している。

(22) 一大国

和名抄の壹岐島壹岐郡（いきのこほり）と壹岐島石田郡（いしだのこほり）である。「いきのくに」の「いき」と「いしだのくに」の「だ」からの「いきだ」を一大で表して「イチダイ」に写音し、「いきのくに」と「いしだのくに」を一大国で表記したと考えられる。邪馬壹国は別格であるので、区別して壹でなく一を用いたと考えられる。壹岐島は「いつのくに」の分国であることを表した倭人の漢字表現に思われる。

(23) 好古都国

和名抄での豊前国と豊後国を合わせた、律令制以前の豊国（とよのくに）および、和名抄筑前国遠賀郡の領域とする。現在の福岡県北九州市、田川市、香春町、苅田町、行橋市および、国東半島（くにさきのくに、郡支国）を含んだ大分県の領域である。既出の遠賀郡（おんがのくに、為吾国）、企救郡（きくのくに、鬼奴国）は現在の北九州市である。

鹿島舜によれば、国東の重藤は紀元前１５００年頃に砂鉄を産しヒッタイト人の指導により製鉄基地が世界一となり、鉄製品を殷文化圏に運び、紀元前１０００年頃には殷・商文化圏のエブス人が稲作技術の発展した北部九州に渡来し、豊日（とよひ）国を建て、豊前京都（みやこ）郡（行橋市付近）に都を、神殿を宇佐に置いたという[37)]。我が国の第一王朝の始まりという。現在、行橋市には豊日別宮（とよひわけのみや）がある。魏使が倭国を訪ねた頃には都は宇佐に遷っていて、古い都があった国であることを倭人から知らされたと考えられる。鹿島舜の桓檀古記によれば、朝鮮半島の釜山付近にあった狗邪韓国はこの国の分国であったという[16)]。しかしながら、魏志倭人伝では、本国であるこの国は好古都国と表記されている。

その理由を考えてみる。先述したように、８世紀の初めに、肥後国、豊前国から住民が薩摩国、大隅国に移住させられた。現在、霧島市国分に韓国宇豆峯（からくにうづみね）神社があり、霧島連山に韓国（からくに）岳があり、これらは豊前に所縁を持つ。韓国宇豆峯神社は７１４年に、正八幡神社とともに大隅国に祀られた[38)]。正八幡神社は霧島市隼人の現在の鹿児島神宮である。加羅（韓）からの渡来人は、田河の香春岳に祭った神を分祀して宇佐の辛国宇豆高島（からくにうづたかしま）（稲積山）に降臨したとして祭っていた。後に小椋山の北辰社、さらに、７２５年に宇佐八幡宮へと発展させた[38)]。祭祀を担った渡来人は辛島氏を名乗り、後に２８３年にこの地に渡来した弓月の君を祖とする秦氏の配下となったとされている。現在の宇佐市に辛島の地名が残っている。

秦氏は秦の末裔と称する人々で、失われたユダヤの１０支族のうちのユダ族、辛島氏も１０支族の人々とされている[39)]。彼らは世代を継いで倭国に至るまで、様々な民族と言葉に接し、豊かな文化を蓄えてきたであろう。アフリカ、中央アジア、シルクロードには、独特の地名、人名、例えば、Khufu（クフ、フーフー）王、Khubilai khaan（クビライハーン、フビライハーン）、Khorramabad（ホッラマバード、イランの都市）が与っており、日本人には発音が難しい。彼らはkha,　khu、kho は発音でき、さらに指導者は漢語と和語の橋渡しができたであろう。その上で部族に結集を呼びかけるために、穏語を使ったと考えられる。

和名抄の豊前国宇佐郡（うさのこほり）に葛原郷（くずはらのさと）があり、現在の宇佐市に葛原の地名がある。葛は和語では「くず」、「かずら」と読み、呉音は「カチ」である。葛という国は、中国河南省商丘市寧陵県に殷に滅ぼされた夏の時代に在った国で、その地から葛氏が生じたという[40)]。商丘市の近くの河南省開封市にはユダヤ人が漢代に到達し、５００世帯以上のコミュニティが最近まであったことが確認されている[41)]。渡来したユダヤ人が開封と葛のことを知っていたかも知れない。また、秦氏は現在の中国新疆ウイグル自治区にあったユダヤ人の国・弓月国（ゆづきの

くに、クウガチコク）から渡来した人々で秦の末裔と称していた[39]。月は呉音が「ガチ」である。朝鮮半島から先に九州島に渡来した辛島氏は辰韓（秦韓）の秦人（秦氏）のことを知っていたと考えられる。そこで、いくつにも解釈される葛の漢字に対して「くず」の和語を当てたと考えられる。「くず」を「khudzu」で表示すれば「くず」、「ふず」、「うづ」の発音が有り得る。また、辛の漢字は加羅（韓）の代わりで、呉音で「シン」、拼音では「xin」となり、秦の呉音は「ジン」、拼音では「qin」である。「から」を「kara」で表示すれば「カラ」、「カル」の発音が有り得る。

葛原の葛と辛島の辛から取った葛辛「くずから」は「ウヅカル」の発音となり得て、イッサカル（Issachar）族を暗示すると考えられる。イッサカル族も失われたユダヤの１０支族であり、司馬懿に滅ぼされた公孫淵はイッサカル族の公孫度の孫で、卑弥呼は公孫度の娘という説がある[16]。イッサカル族の名を代表してユダヤ人に呼びかけるために、朝鮮半島に「くずからくに」を置き、九州島に「からくにくずのくに」を置き、集結する国を暗示させたと考えられる。国を預かる立場の王や祭祀者は漢字で朝鮮半島の国を「葛辛国」、九州島の国を「辛国葛国」と書けることは知っていても秘密を守るために、民には「くずからのくに」、「からくにくずのくに」の国の呼び名だけ教えたと考え得る。

陳寿は朝鮮半島の分国「くずからのくに」の「くず」を狗邪で、「からのくに」を韓国で、国名を狗邪韓国で表記し、「クジャガンコク」に写音したと考えられる。一方、九州島の本国には敬意を払い、「からくにくずのくに」の「から」を好で、「くずのくに」を古都国で表記し、国名を好古都国で表記し、「コウコツコク」に写音したと考えられる。この場合、発音が「ず」でなくて「づ」に近い「都」の文字で「みやこ」の意味を表したかったと考えられる。筆者が１９９３年に南京での国際会議に出席したとき、南京古南都飯店に宿泊した。現在も場所は移ったがそのホテルがある。南京市は名古屋市と姉妹都市であり、巧妙に両都市の名前をホテル名に織り込んでいて、中国人の伝統的な命名法が生きている。また、弓月国（クウガチコク）と好古都国（コウコツコク）は極めて近い漢語の発音（呉音）となっており、陳寿は弓月国のことを知っていて古都国の表記を用いたとも考えられる。弓月国から２８３年に弓月君（融通王）が民を連れて倭国に渡来したのは当然と考えられる。弓月はkhughatuで綴れば中国流のイッサカルの表現のように思われる。

この国は隋書倭国伝において秦王国と記された国である。隋の使者の裴清が来たとき、そこの住民は華夏（中国）と同じで、疑わしいが解明できないと記している[16]。秦氏はその後、山城国葛野郡（かどのこほり）の太秦を本拠地とし中央政権に進出していったとされている[42]。

時代を下っての豊前国の辛国宇豆高島、大隅国の韓国宇豆峯の各神社の宇豆（うづ）は葛（khudzu）に絡むと考えられる。肥後国託麻郡（たくまのこほり）漆島郷（うるしまのさと）は「うづしま」の訛でユダヤ系の渡来人がいたと思われる。

(24) 狗邪韓国

前述のとおり、この国は葛辛国「くずからのくに」であり、釜山付近に在ったとされている。「くずからのくに」を狗邪韓国で表記し、「クジャガンコク」に写音したと考えられる。中国、朝鮮半島のユダヤ人達は葛辛国がイッサカルの穏語であることを知り、この国を目指して来たと考えられる。葛辛国、狗邪韓国の漢字表現、「くずからのくに」の倭名のいずれであっても発音から彼らには何を意味するか分かったであろう。

魏志東夷伝韓伝によれば、「韓は帯方郡の南にあり、南は倭と接し、馬韓、弁韓、辰韓に分かれる。辰韓は昔の辰国で辰王は月氏国に統治する。馬韓は凡そ５０余国ある。」の記述があり、馬韓の中に月氏国、卑弥国の国名が上げられている[43]。さらに馬韓の項に、「その男子時時分身あり。又州胡、馬韓の西海中、大島上にあり。その人やや短小にして、言語韓と同じならず。船に乗りて往来し、韓中に市買する。」とあり、倭人が馬韓の西の諸島にいて、海洋民族であることを示唆している。辰韓の項には、「辰韓は馬韓の東に在り。古の亡人秦の役を避け来りて韓国に適き、馬韓その東界の地を割きて之に與う」とあり、秦からの亡命者のために置かれた国であることが述べられている。そして、弁、辰韓の項では、「弁、辰韓合わせて２４国、その１２国、辰王に属す。辰王は常に馬韓の人を用いて之と作し、世世相継ぐ。」とあり、倭国の統治に似た体制が見られ、中に弁辰狗邪国、弁辰瀆盧国、弁辰斯盧国の名がある。さらに、「鉄を出だし、韓、濊、倭、皆従いて之を取る。男女は倭に近く、亦、分身す。其の俗、行く者、相逢はば、皆住して路を譲る。」とあり、倭人が鉄を求めに来て、風俗が倭に近い。しかし、「瀆盧国は倭と界を接し、その人形は大なり。衣服は潔清にして髪長し。」とあり、倭と接する秦人と思われる民族が倭と異なることが記されている。

これらの記述にあるように、倭人は三韓の地で秦人らに接し、彼らの文化を知っており、九州島に彼らが渡来する下地を作ったことが分かる。狗邪韓はhuzahanで綴れば「フザン」すなわち現在の釜山に繋がるように思われる。

(25) 邪馬壹国

先に述べたように八代海側の水俣市、出水市から人吉市、球磨地方、伊佐地方、霧島連山の北側のえびの市、小林市を跨ぎ宮崎平野の宮崎市から延岡市に至る領域である。都城市は鹿児島県の曽於市に盆地が繋がっていて、狗奴国の領域と考える。日南市は緩衝領域と考える。串間市は狗奴国の領域と考える。

女王都は西都市付近とする。西都原古墳群がある。和名抄日向国児湯郡（こゆのこほり）覩唹郷（とおのさと）は現在、都於郡（とのこおり）として地名が残っている。この付近を中心として都があったと考えられる。都於郡は標高９５ｍの台地にあり、中世に田島氏によって築城され、１３３７年に伊豆から伊東祐持氏が入城し、１５７７年島津氏が支配するところとなり、１６１５年江戸幕府の一国一城令により廃城となった[44]。現在は、都於郡城跡の主要部５カ所の曲輪は土塁で囲われ、空堀で隔てられた典型的な山城の様相を呈しているが、城として機能したと時代は、台地は全て城塞となっていたと伝えられ約５０ヘクタールの城域が推定されている。他に、和名抄日向国児湯郡には三宅（みやけ）、都野（つの）、韓家（からや）、平群（へぐり）などの郷が見られ、都や渡来人に関係する地名と考えられる。辛家（からや）は宗像郡、平群（へぐり）は早良郡にも見える郷名で、民が北部九州から移住した名残と考えられる。隋書倭国伝において「都於邪靡堆、則魏志所謂魏志邪馬臺者也」と記され[16]、和訳すれば「都は邪靡堆（やまと）、魏志の謂うところでは邪馬臺（ヤマタイ）である。」となる。上記漢文の都於から地名を覩唹として残したと考えられる。都於は「みやこがある」と読めるが[13]、和名抄を書いた官僚が都の代わりに覩（見る）、於の代わりに唹（笑う）の漢字を使って意味を伏せたと考えられる。しかし、後代に地元の知識人が都於郡と書き、「みやこのあったところ」の意味を著わしたと考えられる。

西都原古墳群には３２７基の高塚墳墓があり、その中で九州最大の男狭穂塚古墳が卑彌呼の墓、２番目に大きい女狭穂塚古墳が壹與の墓という説がある[23), 45]。宮崎県知事が宮内省の許可を得て、大正元年１２月から大正２年１月に東京帝大、宮内省、帝国博物館の委員が調査した。その後、昭和９年、１１年に引き継いだ委員が調査した。昭和１５年にそれまでの調査報告をまとめて、日本古文化研究所報告第十　西都原古墳の調査として刊行された[45]。宮崎県教育委員会が平成７年から平成１４年にかけて大正時代に調査した３０基のうちから６基を選んで再調査、保存整備し、内部見学できるようにした。平成９年から１０年にかけて宮崎県が宮内庁の許可を得て男狭穂塚、女狭穂塚を測量調査した結果、男狭穂塚は全長１５４メートル、直径１３２メートル、高さ１９メートルで日本最大級の円墳で、形状について謎が残るとされている[23]。倭人伝に記された卑彌呼の墓、径百余歩に近い（１００×０．７６×２＝１５２メートル）。大正から昭和にかけての調査報告書には男狭穂塚古墳は柄鏡式とされ、このとき円墳に柄を付けて改竄した疑いがあるとされている[45]。最新の科学技術を駆使した男狭穂塚の真の学術的な調査が待たれる。しかしながら、その時の調査で、男狭穂塚の陪冢とされる１６９号古墳から、朱砂、４０歳前後の人の頭骨、鏡、刀剣、宮殿を思わせる子持家型埴輪が出土しており、卑彌呼の宮殿に出入りした弟とされる人物またはその親族がそこに埋葬された可能性が考えられる。女狭穂塚の陪冢とされる１７０号古墳からは構造船を思わせる舟形埴輪が出土している。

この国が女王の都とする国であることの傍証を示す。西都の地は古代から祭殿原（さいとのはる）と呼ばれていて、江戸時代に西都原と書き「さいとのはる」から「さいとばる」に地名が固定されたという[46]。卑彌呼の祭殿があった名残と考えられる。その、宮（みや）あるいは都（みやこ）の先にあるという意味で宮崎という地名が起こったと考えられる。魏志倭人伝の女王国の記述に「官に伊支馬（いきま）あり。」と記され、宮崎市に生目（いきめ）古墳群にその名が残っている。全数５１基の古墳の中で最大の１号墳は全長１３６メートルの前方後円墳である[47]。３世紀末から５世紀にかけて築造されたとされており、この間王権が続いてきた一つの証と考えられる。さらに、北部霧島連山に夷守（ひなもり）岳があり、麓の小林市は古くは夷守（ひなもり）と呼ばれていた[24), 48]。魏志倭人伝の対海国、一大国、奴国、不弥国の記述の中に「副を卑奴母離（ひぬもり）という。」があり、女王都への途中の国の副官の名前が地名として残ったと考えられる。小林市の西に隣接の、えびの市の島内に古墳群が存在し、２０１５年１月に地下横穴式の１３９号古墳からは古墳時代中期から後期とされる鉄製の甲冑、弓矢、刀剣、馬具などと男性、女性とみられる人骨の各１体が未盗掘で発見された[49), 50]。西都原の古墳からも鉄製の同形の甲冑が発掘されており、邪馬壹国の後継の国が古墳時代までその地域で続いた可能性を示唆している。その説明会資料には、横穴式墳墓が鹿児島県の伊佐市から湧水町、宮崎県のえびの市、小林市へと、筆者が述べた魏使の路程上に数珠繋ぎのように並んでおり、女王都への道筋の国々の守りが固められた証左と考えられる。また、魏志倭人伝と隋書倭国伝において「儋耳（海南島）と相似する。」、隋書倭国伝において「阿蘇山あり。」と記され、倭国とその後継の倭国

がある九州島と海南島が両方とも火山があり、大きさも近いことを述べていている。さらに、隋書倭国伝において「葬儀に及ぶと、屍を船上に置き、陸地にこれを牽引する。」とあり、海岸に近いところに国があり、海洋民族の習慣が残っていることが伺える。先述の構造船の舟形埴輪からも航海技術に長けた人々の国であることが裏付けられる。

いよいよ邪馬壹国の和名を推定する。魏志倭人伝に「其の国、本亦男子を以って王と為し、とどまること七八十年。倭国乱れ、相攻伐すること歴年、すなわち一女子を共立して王と為す。名づけて卑彌呼という。」とあり、大国どうしが話し合って女王を擁立したことが分かる。鹿島舜によれば、伊都国（筑紫）、多婆羅国（肥後）、狗邪韓国（宇佐）、安羅国（日向・薩摩）の諸王が図って女王とその国を建てたとしている[16]。これまでの議論と整合性の取れない部分を修正して解釈する。そして、安羅国を、薩摩、日向に分かれる前の日向の領域として、宮崎県、鹿児島県に吾平（あいら）山稜および「あいら」の地名があることに基づき、仮に「あひらのくに」としておく。「からくにくずのくに」、「たうまのくに」、「いつのくに」、「あひらのくに」から国名を「くずまいつのくに」としたと考える。日本語の響きと国の勢力関係を織り込んだ。「からくにくずのくに」は最大勢力の国であり、「たうまのくに」はしんがりの渡来人の国であり、「いつのくに」は倭奴（わぬ）国からの伝統がある国である。「いつのくに」は新しい国に秩序ある統治を持ち込もうとして、役人と民を送り込んできたと考えられる。もともとイッサカル系などのユダヤ人が統治する「からくにくずのくに」、「あひらのくに」、「たうまのくに」に系統が異なる「いつのくに」が名実ともに新しい国に加わったことによって、「あひらのくに」の南部が分かれて狗奴国を建てたと考えられる。現在でも市町村合併でよく起こることである。陳寿は、新しい国「くずまいつのくに」からの「ずまいつのくに」を邪馬壹国と表記し、「ジャマイチコク」に写音したと考えられる。

陳寿は、史記の琅邪臺（Langyatai）の記述を知っていて、のちに邪馬臺（Yamatai）と誤記されることを期待していたように思われる。范曄が後漢書で邪馬臺国と書き、以後、中国でこの表現が浸透し、倭国でも中国への朝貢によって邪馬臺（やまたい）の表現と読みを知り得たと考えられる。そして、隋書倭国伝にあるように隋代になって仏教とともに膨大な数で入ってきた漢字を使ってこの国名を邪靡堆（やまと）とし、隋書では堆の漢音（タイ）を昔の倭に似て発音が同じ俀（タイ）の漢字を使って国名を俀国（タイコク）と表記したと考えられる。「やまと」はヘブライ語で「神の民」を表すとされており、弓月国があった新疆ウイグル自治区のイリ川の上流に「野馬渡、Yamatu」で表される地名が現存する[25),41)]。かくして、弓月国にいたユダヤ系の秦人が安住の地として彼らの国を西都原に建てたのである。その後、大いなる倭の意味の倭奴（わぬ）に対して大和の漢字を当て、「やまと」と読ませるようになったと考えられる。九州の各地に、山門（やまと）という地名ができ、現在でも、佐賀大和、山都などの地名が創られている。

現在、西都市に都萬（つま、都万）神社がある。この神社の名称は「くずま」を略した「づま」、「つま」に由来していると考えられる。

なお、女王卑彌呼の名前の意味、由来については、多くの説があり[28)]本論の主題から外れるので、議論しない。

(26) 狗奴国

現在の島嶼部、伊佐地方を除く鹿児島県、および宮崎県都城市、串間市の領域とする。先述のように、７２０年の隼人の乱以前に肥後、豊前の民が薩摩国、大隅国に移住し、肥後や豊前の地名が持ち込まれたので、影響がないと考えられる和名抄の地名を参照する。

海岸にあり稲作が容易で、「くずまいつのくに」に近い地域として志布志湾に面した海岸を考える。和名抄大隅国姶羅郡（あひらのこほり）に串伎郷（くしきのさと）と野裏郷（のうらのさと）がある。現在では串伎郷は東串良町および鹿屋市串良町、野裏郷は大崎町に当たると考えられる。この付近に王都があって、王は「くずまいつのくに」に対抗し、誇り高さを込めて、その国名を考えたであろう。「くしき」と「のうら」を組み合わせて５文字の名前にするとき、「のうら」の扱いに意を巡らせたであろう。「くしき」は和語では「奇しき」や「楠木」を当てられよう。「葛」と同根かもしれない。裏は浦の意味と思われるが、「うら」は影の意味があるので、候補から外したであろう。「のら」は万葉集で現在と同じく野原の意味で使われているが[8)]、野蛮さの意味があり、相応しくない。「ぬら」は当時の発音に近いかもしれない。このようにして、国名を「くしきぬらのくに」としたと考え得る。あるいは、野裏は肥前国の松浦（まつら）郡の例にあるように、「ぬら」と読んだのかもしれない。大崎町を流れる田原川の上流に野方（のかた）、野神（のがみ）、下流の川沿いに平良（ひらら）の地名がある。もし、「ぬら」がその後の「のら」または「なら」の発音であると考えてみる。「なら」は平らな意味があり、「ならす」は「均す、平す」と書く[8)]。また「なら」はヘブライ語では川があるところ[51)]、新羅語では国の意味がある[52)]。国名を「くしきならのくに」の意

味を表すために「くしきぬらのくに」と発音したかもしれない。「なら」は奈良に関係があり、後に議論する。

いずれにしても、国名を「くしきぬらのくに」としたとする。大和、奈良の朝廷に使えていた隼人の人達は狗吠（犬の吠え声）を発したので、隼人の呼び名は「吠え人」から起こったと云われている[26]。その隼人よりも前の時代にこの地に生きた武人もやはり吠えていて「犬野郎の国」とあだ名されていて、そのことを魏使が聞いたと考えられる。陳寿は、その意味も込めて、この国名から「くぬ」を取り出して、狗奴国で表記し、「クヌコク」に写音したと考えられる。

魏志倭人伝に「其の南、狗奴国あり、男子王たり。其の官に狗古智卑狗有り。」とある。狗古智卑狗は「かぐちひこ」からの写音を表すと考えてみる。「かぐ」は火、光を表す古語で「かがり」、「かぐや」はその例である。鹿児島は火を噴く島「かぐしま」すなわち現在の桜島から起こった地名という[53]。筆者は桜島も「（地が）裂くる島」から起こった地名と考える。「かぐ」への道「ち」の男、即ち「火の島への道を守る男」が「かぐちひこ」の意味であると解釈する。奈良の香具山（かぐやま）は火に関係ないので、「かぐしま」の地名が関わっていると考えられる。

「くしき」を khusk で綴れば、やはりイッサカルの名前が隠れている。 魏志倭人伝に「倭の女王卑彌呼、狗奴国の男王卑彌弓呼ともとより和せず。」とある。卑彌弓呼を「ひみくが」あるいは「ひめくが」からの写音を表すと考えてみる。「くが」に対応する和語として国処（くにが）に由来の陸（くぬが、くが）がある[8]。一方、弓月国は先述のように呉音で「クウガチコク」と読める。国王は自身が弓月国に遡る者であることと、倭国の宗主たらんことを含めて、「くが」の名を使ったと考える。「ひみ」は（卑彌呼と故地が同じ？）馬韓の卑弥国の出自であることか、「火を見る」国であることを含めて、「ひみ」を使い、「ひみくが」を名乗ったと思われる。また、「ひめ」は中国から渡来した「姫氏（キシ）」[34]の末裔であることを主張して、「ひめくが」を名乗ったと思われる。姫氏は周の王族の太白の子孫として倭国に亡命した人々と云われ、漢語の「姫」が和語の「ひめ」に対応することを知っていたと考えられる。隼人の乱で隼人が立て籠った城の一つが、比賣乃城（ひめのき）、現在の霧島市隼人町の姫城山（ひめぎやま）であり、それを取り囲む部落が姫城（ひめぎ）地区である[26]。姫氏が関係した地域と思われる。

陳寿は、この国が邪馬壹国と同じく弓月国の流れを汲む国であることを魏使の報告から知っていて、国王の名「ひみくが」または「ひめくが」を「弓」を使って「卑彌弓呼」と表記したと考えられる。

志布志湾の沿岸には幾つかの遺跡と遺物がある[54]。大崎町の神領古墳群には１３基余りの高塚古墳、６基の地下横穴式墓があり、その中で１０号墳（前方後円墳）から武人埴輪が出土し[55]、最大の６号墳は前方後円墳であって全長４３メートル後円部径１９メートルであり、鏡２面が出土している。同じく大崎町の横瀬古墳は前方後円墳であって、全長１６５メートル、後円部径６４メートルであり、周囲を堀で巡らし円筒埴輪で飾られていた。そして、東串良町の唐仁古墳群には１４０基以上の古墳があり、その中の１号墳は大塚古墳と呼ばれる鹿児島県で最大の前方後円墳であって、全長１８５メートル、後円部径６５メートルある。墳丘部はめくれて竪穴式石室が露出しており、その上に大塚神社が建てられている。過去の調査で石棺は花崗岩で細工され内部の側面には朱が塗られ、石棺の北側に短甲が置いてあったとある[56]。大塚を中心として放射状に百数十基の墳墓が築かれていて、現在それらの墓の間に墓を守るかのように人家がある。さらに、肝付町の塚崎古墳群には４基の前方後円墳、３９基の円墳、１１基の地下横穴式墓があり、その中で４０号墳は前方後円墳で最も大きく全長５２メートル、高さ７．８メートルある。鹿屋市祓川の王子遺跡の地下横穴式墓からは５世紀末と云われる衝角付冑と短甲が出土している[57]。塚崎古墳が３世紀末、その他が４世紀から５世紀の築造とされている。これらの遺跡は今後の詳しい調査によって新たな遺物の発見に繋がる可能性がある。

志布志湾北部の現在の宮崎県串間市で１８１８年に農夫が王之山の石棺中から大きな玉璧を発見した[58]。玉璧は周りにあった鉄剣の錆が浸み込んで変色しているが、直径３３．２センチ、厚さ０．６センチもあり、本場中国でも最大級といわれるほどの物である。その後、幾人かの手を経て現在、旧加賀藩主前田家の公益法人・前田育徳会が所有している。中国の前漢時代に製作された玉璧と見做されている。従来、なぜ辺境の地で発見されたのか理由が説明されなかったが、志布志湾沿岸に狗奴国「くしきぬらのくに」があったとすれば理由は予想できる。「くしきぬらのくに」は三国時代に魏に朝貢する邪馬壹国「くずまいつのくに」に対抗して呉に朝貢していたので、玉璧は呉から下賜されたものと考えられる。この国の王族ゆかりの高貴な人物が王之山の墓に葬られたと考えることができる。

志布志湾北部の現在の鹿児島県の松山、志布志、大崎地区は明治の初期に南諸県郡であり、律令制の下で救二院（くにいん）の租税区画として統治されていた[59]。蔑称の「クヌ」の国を知っていた官僚が付けた名称か

もしれない。現在、大崎町の海岸には広大な「くにの松原」が広がっている。大崎町の町木は「楠木」であり[60]、奇しくも「くすき」が蘇ったような感がある。薩摩半島の東シナ海側に串木野（くしきの）の地名があるが、隼人の乱などの動乱の時代にこの地から住民が移動したことによると考えられる。志布志湾南部の肝属川河口の波見港は古くは倭寇の拠点地、島津藩の時代には明との貿易港として栄えた港である[61]。対岸の遺跡がある唐仁（とうじん）の地名は明の人々が居住していた名残と考えられる。志布志石油備蓄基地の近くは柏原（かしわばる）海岸であり、奈良の橿原（かしはら）の地名に関係があるように思われ、神武の出航地とする石碑がある。志布志湾北部のダグリ岬にも神武の出航地とする石碑がある。

5.　倭国の進展の痕跡

5.1 神武伝承

古事記よれば神武・神倭伊波礼毘古命（かむやまといわれひこのみこと）は高千穂の宮で兄五瀬命（いつせのみこと）らと相談し、東へ行くことにし、日向を発ったとある[33]。また、日本書紀では神武は神日本磐余彦尊（かむやまといわれひこのみこと）、始馭天下之天皇（はつくにしらすすめらみこと）、若御毛沼命（わかみけぬのみこと）、狭野尊（さののみこと）、彦火出見（ひこほほでみ）と称されている[62]。さらに、日本書紀において「昔、イザナギのみこと、この国をほめて日本は浦安国（うらやすのくに）、細戈千足国（くわしほこちたるくに）、磯輪上秀真国（しわのぼるほつまのくに）とのりたまう」と読まれている箇所がある。従来、細戈千足国は「細くて美しい、良い武器がたくさんある国」と説明されていたことに疑問が呈されている[63]。

現在の鹿児島県霧島市の霧島神宮の鳥居下の道路を通り都城市へ向かって下ったところの、都城市美川町西岳地区に千足（せだらし）神社があり、高千穂の峰から千足川（せだらしがわ）が流れている。千足川とは細い支流が幾つも垂れて合流している川の意味であろうか。千足神社は８世紀初め頃の創建で、祭神は瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）など神代３代と説明書きにある。この川筋の町から見上げると、高千穂の峰は美しく太く尖った戈のように見え、この峰こそ「くわしほこ」であると思われる。つまり、細戈千足国は「くわしほこせだらしのくに」と読むのが正しく、この地域を指すと思われる。また、高千穂の山裾の道路を御池の側を通り小林市方面に向かう途中の高原町に狭野神社があり、祭神は神日本磐余彦尊（かむやまといわれひこのみこと）である。その創建は前５世紀の頃（？）で、その後霧島山の噴火により社殿の消失と遷座を繰り返し現在地には１６１０年に遷座されたと説明書きにある。また、彦火火出見（ひこほほでみ）は幾つかの火山の噴火を見据える男の意味にとれる。標高１５７４メートルの高千穂の峰に上れば、北西に峰裾の御鉢、新燃岳、韓国岳、南に桜島、開聞岳などの活火山を望むことができる。これらのことから、神武はこの地域の出自であると考えられる。

さらに、高千穂の峰の霧島市側は田口（たぐち）地区であり、その麓から高千穂の峰を見れば噴火口の御鉢（おはち）、頂上、尾根筋が一体となって蛇が口を開けているように感じられる。「た」は「なか」と同じく蛇の意味があり[19]、田口は「へびのくち」の意味になる。穂は尖った先を意味する。従って、高千穂（たかちほ）とは田口穂（たぐちほ）から生じた名称と思われる。高千穂の峰には古くから岑（みね）神社が頂上と御鉢の間に在ったが、噴火で炎上し９５０年に登山口の高千穂河原に霧島神社として遷座し、１２３４年の噴火による災禍、１４８４年の再興を経て、１７１５年に現在の地に落ち着いた。現在名は霧島神宮となっており、主神は瓊瓊杵尊、殿神は木花咲耶姫尊、彦火火出見尊、豊玉姫尊、鵜鷀草葺不合尊、玉依姫尊、神倭磐余彦尊とされている[64]。古代の岑（みね）神社は、現在では霧島東神社、狭野神社、霧島神宮、霧島岑神社などに分社されたとなっている。神武兄弟らが相談した高千穂の宮とは岑神社のさらに先代の祠のような小さな社であったと考えられる。現在でも大抵の霊山の頂上付近には祠がある。高千穂の峰からは四方に視界が開け、神武兄弟らが海原の彼方の東方の未知の地に想いを馳せたのは自然に思われる。

日本書紀は神武について以下のように記している。鵜鷀草葺不合尊の第４子として生まれ、１５歳で太子となり日向国吾田村の吾平津媛を妃とし、手研耳命が生まれた。前６６７年に４５歳のとき兄弟と子らに東に行くことを述べ、賛同を得た。前６６７年１０月に兄弟らと船で発ち速水の門を経て菟狭国造の菟狭津彦を訪ね宿舎と饗応を得た。前６６７年１１月に筑紫国の岡之水門に、１２月に安芸国の埃宮に行った。前６６６年３月に吉備国の高嶋宮に行き、３年間留まり、船と兵食を蓄えた。前６６３年２月に軍を船団で進め、難波の埼を経て３月に河内国の白肩の津に着いた。４月に長髄彦と戦い五瀬命が矢に当たって軍を引き、５月に五瀬命は死亡し紀伊国の竈山に埋葬した。前６６３年６月に熊野神村で海が荒れて陸に上がれず兄の稲飯命と三毛入野命が入水し果てたが、神武は皇子手研耳命とともに軍を進め熊野荒坂津に着いた。以後、兄猾、八十梟帥、長髄彦らを討ち、前６６２年３月に橿

原を都とした。前６６１年９月に五十鈴媛命を正妃とした。前６６０年正月に神武は帝位に就き、後に皇子の神八井命、神渟名川耳尊が生まれた。前６３０年４月に巡行し、「・・・日本は浦安の国、細矛千足国、・・・」を語った。前６２９年正月に神渟名川耳尊を皇太子とした。前５８５年３月に天皇は橿原の宮で崩御し、畝傍山東北の陵に葬られた。４５歳から３年５月準備し、１年戦い、２年で都を造ってから５２歳で即位し、３１年後に８３歳で皇太子を神渟名川耳尊に決め、さらに４４年後に１２７歳で亡くなったことになる。

神武がいた時代については、中田力が歴代の天皇の在位期間の統計処理により、神武の即位した年は２８２年と推定している[15]。即位したとき５２歳とすれば、２３０年に生まれたことになる。東征の様子は、部分的に脚色があるが、極めて具体的であり、事実に基づいていると考えられる。１２７歳で死ぬことは異様であり、空白の年数が引き伸ばされてと考えられる。そこで、１２の倍数年で調整し、４５－１２＝３３歳で東征し、４０歳で即位して３１－２４＝７年後に皇太子を決め、さらに４４－２４＝２０年後に亡くなったとすれば、寿命は１２７－６０＝６７歳となり、当時としてはやや長命と思われる程度になる。崩御したとき皇太子神渟名川耳尊は２４～２７歳であり、後に綏靖と諡号される王に即位するには十分な年齢に達している。明治維新のリーダ、西郷隆盛、大久保利通は明治元年にそれぞれ４１歳、３８歳であり、想定した神武の即位４０歳は政治家として力を発揮できる年齢である。即位年を基準にすれば、神武は２８２－４０＝２４２年に生まれ、２８２＋２７＝３０９年に亡くなったことになる。卑弥呼は２４７年に亡くなったので、神武はこの時５歳で何も分からないが、成長するにつれて「くずまいつのくに」の女王が卑彌呼から壹與に代わっても自分が居る国「くしきぬらのくに」との敵対関係が続いていることを冷厳に見るようになったと考えられる。

日本書紀、古事記では年代が前に６６０＋２８２＝９４２年遡上されているので、魏志倭人伝の時代に戻して、神武東征を考える。神武は出発に先立ち、「くしきぬらのくに」の国王に秘密裡に考えを伝え、同伴者、船、兵糧、お金の代わりの塩を確保し、国王から同族の「からくにくずのくに」の宇佐に行き知恵を授かるように指示されたと考えられる。伝承の地、錦江湾福山の宮浦、屋久島の宮之浦など宮の付く地に立ち寄り、志布志湾の波見港とダグリ岬から夜闇に紛れて出航し、日向灘のはるか海岸を離れたところを北上し、「からくにくずのくに」の宇佐に着き、１か月人知れず秦氏の知恵者から戦略を授かったと考えられる。そして使者を加えてもらって「おんがのくに」の岡田の宮に行き、参謀、兵、食糧とそれらを積む船、同族が住む領域の情報を得たと考えられる。岡田宮は現在、北九州市八幡西区のJR鹿児島本線黒崎駅の南にあり、神日本磐余彦命（神武天皇）、大国主命などが祀られている[65]。そして、神武らは１か月後に阿岐国の多祁理宮に移動することになる。和名抄安芸国佐伯郡（さいきのこほり）は阿岐国を支配した佐伯氏の本拠地であり、緑井郷（みどりいのさと）の現在の広島市安佐南区緑井付近から海郷（うみのさと）の現在の廿日市市付近までの領域で、神武らが３か月滞在し、同志を募り、近辺の情報を探ったと考えられる。グーグル地図によれば、現在JR山陽線、可部線、広島電鉄、広島高速交通の沿線に囲まれた安佐丘陵の裾には４０余の神社があり、まさに埃（ちり）のように夥しい数である[25]。当時も多数の神社があって、埃宮と表現したとも思われる。さて、緑井の南部で西北から太田川に流れる安川の右岸河口付近に祇園地区、JR可部線長束駅南西に高乃宮神社、広島電鉄草津駅北西に草津八幡宮がある[25]。高乃宮神社は旧安佐郡原村字東原にあった神社を１９４７年に遷したもので、大国主命などが祀られている[66]。原村は和名抄の安芸国安芸郡幡良郷（はらのさと）である[67]。草津八幡宮は、推古天皇の代（５９２年～６２８年）に厳島神社とほぼ同じ時期に多岐理姫命（宗像女神の湍津（たぎつ）姫）を守護神として祀ったのが創りとされているが、さらに遡る可能性があり、現在は宗像三女神、品陀和気命（ほんだわけのみこと）などが祀られている[68]。草津は宇佐の神を祀る津、宇佐津が訛ったとも言われている。神武らはその後、吉備国の高嶋宮に移り、３年間、将軍、兵を集め共に鍛錬し、食糧、武具、軍船を調達した後、浪速に向かったと考えられる。和名抄備前国上道郡（かみつみちのこほり）幡多郷（はたのさと）付近が現在の旭川左岸の岡山市中区高島の地域で北部の竜の口山と南部の操山の間にあり、当時は船が通行できたと考えられる。その地域には、幡多、八幡、祇園の地名、備前八幡宮があり、竜の口山西南の麓の祇園地区に高島山神社、備前国総社宮がある[25]。備前国総社宮は火災に遭って最近再建され[69]、それ以前から境内には神武天皇の名が刻まれた石碑がある[70]。「おんがのくに」、安岐国、吉備国の幡、祇園の付く地名は秦氏一族がその地域に居たことを裏付けており[39]、彼らの協力によって神武東征が達成されたと考えられる。

神武が橿原の地に都を開くと、九州島の「からくにくずのくに」、「くしきぬらのくに」には報告が届き、秦氏に繋がる人々が橿原の地に移住し国造りに貢献したと思われる。「からくにくずのくに」から葛城、葛野、「くしきぬらのくに」から楠木、橿原、奈良、香具山、時代を下って「くずまいつのくに」の後継の邪

靡堆（やまと）から大和へと、その他の倭国の地名も人の移動とともに文字を変えて伝わったと思われる。

5.2 女王国のその後

魏志倭人伝には魏と女王国との関わりを以下のように記している[28]。２３８年６月に、倭の女王は帯方郡に難升米、都市牛利を貢物と共に送り、太守の劉夏は使者を添わせ都の洛陽に送り、明帝が親魏倭王の詔書を授けた。２４０年に太守の弓遵が梯儁らを倭に下賜物と共に派遣させ、女王は詔恩の意を上表した。２４３年に女王は伊声者、掖邪狗を貢物と共に送り、彼らは率善中郎将の印綬を受けた。２４５年に難升米あてに黄幢を仮に授けた。２４７年に太守の王頎が都に行き、倭載、斯烏越らが帯方郡に来て交戦状況を伝えたと報告し、塞曹掾史の張政らを倭に行かせ詔書と黄幢を難升米に渡させた。そして、卑彌呼が死に、径１００余歩の冢を作り、１００余人を徇葬した。男王を立てたが国中が服せず、千余人を罰して殺した。再び女王として卑彌呼の宗女の壹與１３歳を立て、国中がついに定まり、張政は壹與に檄文で諭した。

魏から女王国に使者が２４０年と２４７年に派遣されており、最初の使者の梯儁らが女王国に２４７年過ぎまで滞在した可能性があり、倭人伝の記述が極めて的確である理由がここにあると考えられる。梯儁らは有明海、八代海、九州内陸部を通る２か月以上の道行で倭国をつぶさに見聞させられたと考えられる。倭国には漢字が分かる役人がいて、梯儁らによる国名の表記などを確認したと考えられる。なぜならば、邪馬は「ずま」を「ジャマ」に写音したが、「ヤマ」の音も表せるので、将来に念願の「やまと（神の民）」にする余地を残すことを役人が卑彌呼に伝え、彼女も満足したと考え得るからである。２度目の使者の張政らは急を告げるので構造船で日向灘の海岸の女王国に直行したと考えられる。帰路は、梯儁、張政らは一緒に構造船に乗り、日向灘から関門海峡を経て、都斯麻国、一支国伝いに狗邪韓国に着き、乗り換えて帯方郡に送られたと考えられる。

時が流れて、倭国のその後の記述が隋書倭国伝に表れた。その時、いにしえの女王国と首都は漢字で「邪靡堆（やまと）」となっており、「堆（と）」の発音を倭に似た漢字「倭（タイ）」で記し、倭国伝として、その国のことを表したとするのは先述の通りである。

その内容を年代に従って記述すれば以下のとおりである[16]。後漢の光武帝（２５年～５７年）のとき遣使が入朝し、大夫を自称した。安帝（１０６～１２５年）のとき倭奴（ワヌ）国の遣使が朝貢した。桓帝と霊帝の間（１４６年～１８９年）倭国は大いに乱れて順番に相手を攻伐し、何年も国王が居なかった。女王として卑彌呼を共立した。開皇２０年（６００年）倭王の阿毎多利思北弧が遣使を詣でさせた。風俗を尋ねると使者は「倭王は天を兄とし、日を弟とする。日が昇る前に出て聴政し、結跏趺坐し、日が昇れば政務を停め、弟に任せる。」と云い、高祖は「これは道理でない。」と改めるよう訓令した。大業３年（文帝のとき６０７年）倭王の阿毎多利思北弧（あめ・たりしほこ）が遣使に朝貢させた。使者は「海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞き、朝拝に遣わせ、僧侶数十人を仏法の修学に来させた。」と述べ、国書を差し出した。「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙がなきや。」と記され、煬帝はこれを見て悦ばず、取次の鴻臚卿は「蛮夷の書に無礼あり。再び聞くことなかれ。」と告げた。６０８年天子は文林郎の裴清を倭国に派遣した。百済を渡り、竹島、都斯麻国、一支国、竹斯国に至り、東に秦王国に至った。そこは華夏と同じで疑わしいが解明できないとした。また十余国を経て海岸に着いた。倭王は歓待し交歓し、裴清に貢物を渡した。この後ついに途絶えた。

これらの記述から、卑彌呼から壹與までの系譜を考えてみる。１８５年に、卑弥呼が１３歳で共立されたとすれば、卑弥呼は１７２年に生まれ、２４７年に７５歳で亡くなったことになる。壹與は２４７年に１３歳とすれば、壹與は２３４年に生まれたことになる。卑弥呼と壹與の生年に２世代以上の６２年の差がある。卑彌呼は巫女であるので子供を産むことが許されないか、或いはたとえ産んだとしても子供の泣き声で悟られるので、生涯独身であったと考えられる。卑彌呼が７５歳で亡くなるまで弟が政務を担当したとすれば、弟は１０歳以上年齢が離れているとするのが妥当である。壹與は卑彌呼の弟の直系として、弟の孫であるとしてみる。例えば、弟が卑彌呼より１２年遅く１８４年に生まれ、結婚して２５歳のとき２０９年に男または女の子が生まれ、さらにその人が結婚して２５歳のとき２３４年に壹與を生まれたという構図ができる。この場合、２４０年に魏使の梯儁が女王国に来たとき、卑彌呼は６８歳、弟は５６歳、弟の子は３１歳、壹與は６歳、２４７年に魏使の張政が来たとき、卑彌呼は７５歳、弟は６３歳、弟の子は３８歳、壹與は１３歳となる。男狭穂塚の陪冢とされる１６９号古墳に葬られた４０歳前後の人物は壹與の父またはその兄弟であろうか。

また、隋書倭国伝より、６０７年に遣隋使を隋に送り、国書「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙がなきや。」をもたらしたのは、九州の「邪靡堆（やまと）」の国王の阿毎多利思北弧（あめ・たりしほこ）である。この頃の奈良の明日香では３３代の王の推古の時代であるが、まだ神武から３２５年経

た国造りの途上にあったことになる。天皇の称号は６７３年～６８６年に在位した天武天皇からとされている[6]。

なお、秦王国は倭人伝の好古都国「からくにくずのくに」が内陸部まで発展した国と考えられる。「秦王国より十余国」は和名抄の郡（こおり）に相当する「くに」であり、遠賀（おんが）郡から秦王国に入ったとすると、海岸線の郡は企救（きく）、京都（みやこ）、仲津（なかつ）、築城（ついき）、上毛（こうげ）、下毛（しもげ）、宇佐（うさ）、国埼（くにさき）、速見（はやみ）、大分（おおいた）、海部（あまべ）、臼杵（うすき）の１２郡である。首都は臼杵の南隣の児湯（こゆ）郡に在ったのである。

5.3 倭国のその後

神武建国の後、狗奴国すなわち「くしきぬらのくに」は主要な人物は奈良の地に移住し、弱体化し、邪馬壹国すなわち「くずまいつのくに」はやがてこの国を統合し、「邪靡堆（やまと）国」となったと考えられる。一方、好古都国すなわち「からくにくずのくに」は九州の倭国および朝鮮半島の狗邪韓国すなわち「くずからのくに」で権力を保ち、秦王国として栄え、やがて豊国（とよのくに）になったと考えられる。伊都国すなわち「いつのくに」はやがて九州北西部を統合し、竹斯国すなわち筑紫国（ちくしのくに）になったと考えられる。投馬国すなわち「たうまのくに」はやがて火国（ひのくに）になったと考えられる。また、狗邪韓国はやがて任那になったと考えられる。

秦王国の秦氏の一族はさらに新しい近畿の王朝の指導者層の中枢部に入って行き、一族が住む領域を足掛かりにして近畿王朝が支配域を拡大するのを助けたと考えられる。和名抄で幡多、幡田、大幡、小幡、幡羅、幡良　秦、上秦、下秦など秦氏一族が居たと考えられる郷が、九州以東では先述の安芸、備前のほか讃岐、土佐、阿波、淡路、丹波、摂津、河内、参河、遠江、相模、武蔵、下総、常陸の諸国に見え、九州では、肥後国に波太、波良として郷名が見える。これらの中で特に近畿以東の地を足掛かりに近畿王朝は建国から約４００年後の７世紀になって九州王朝以上の支配域を持つようになったと考えられる。ただし、秦氏が介在したので九州王朝と近畿王朝が戦火を交えることはなかったと考えられる。

倭の五王の讃、珍、済、興、武が４１３年～５０２年まで１２回、宋書に表れる[71]のは狗邪韓国を足掛かりに朝鮮半島でも活躍した「豊国」の王と考えられる。４７８年の宋の順帝に対する武の上表文に「・・・東は毛人を征すること５５国、西は衆夷を制すること６６国、渡りて海北を平らぐること９５国。・・・」と述べている。隋書倭国伝において「秦王国は華夏（中国）と同じ」と表現されたように、中国風の王名を名乗ったと考えられる。和名抄の遠賀郡を除く筑前国に１４郡、筑後国に１０郡、肥前国に１１郡、肥後国に１４郡、薩摩国に１３郡、壱岐島に２郡、対馬島に２郡で、合計６６郡になる。長門国に５郡、周防国に６郡、伊豫国に１４郡、土佐国に７郡、讃岐国に１１郡、阿波国に９郡、淡路国に２郡、合計５４郡であるが、近世に備前国児島郡から離れて讃岐国に属した小豆郡[72]を加えれば、丁度５５郡となる。つまり、「豊国」の武王は、北は朝鮮半島南部９５の「くに」、西は九州の西半分、東は和名抄での周防国、四国、淡路国の領域まで制覇したと誇っているのである。和名抄日向国と大隅国の領域の「邪靡堆国（やまとのくに）」は、同族の国あるいは天皇に相当する王がいる倭国の宗主国なので、述べていないのである。「豊国」は倭国内では、その頃一番の強国であったと考えられる。

さらに、武王の上表文に「・・・しかるに句麗は無動にして、図りて見呑を欲し、辺隷を掠抄し、虔劉して已まず。・・・もし帝徳の覆戴を以って、この彊敵をくじき、克く方難を靖んぜば、前功を替えることなけん。・・・」と百済、新羅、任那、加羅、秦韓、慕韓を侵略する高句麗を打ち砕くことを懇願している。その後、任那、加羅が５６２年までに滅び、新羅が百済を脅かすようになった[73]。旧唐書には６３１年、６５４年、６５９年に唐への倭国の遣使が記述され[74), 75)]、特に６５４年には遣使は大きな琥珀と瑪瑙を献上し「新羅が高句麗や百済を侵略しているので危急が生じれば倭王は派兵して救う」と述べている。６５９年には蝦夷人を伴って朝貢している。にも拘わらず、百済が６６０年に唐と新羅の軍によって滅亡し、百済復興を求められた倭国は参戦し、６６３年に唐・新羅の連合軍と白村江で戦い、敗れた[73]。倭国は高句麗、新羅、唐の侵攻を阻止するために、防備のための水城や山城を各地に築いていた[34]。

日本書紀では６４５年に乙巳の変で蘇我氏が滅ぼされ、王統が交代している[76]。白村江の戦いの前の逼迫した時期に起こっている。この辺りの日本書紀の記述は疑わしい[77),78)]ので、仮説を考えてみる。

秦王国の秦氏は神武東征を支えたが、彼らはやがて本州も含めた後の日本を支配するという戦略があったと考えられる。弓月国からはるばる日本列島に辿り着き、西の九州の地で甘んじることは有り得ないと考えられるからである。６世紀半ばから朝鮮半島の情勢が危うくなり、朝鮮半島に一番近い筑紫国に倭国の支配を譲り、近畿政権中枢部に入る機会を伺っていたと考えられる。そして、中臣鎌足らを操り中大兄皇子を王にするという誘いを掛け、６４５年に乙巳の変で蘇我

入鹿を殺させ、聖徳太子、蘇我氏らの正当の王統を倒し、近畿王朝に入る下地を作ったと考えられる。蘇我蝦夷が宮殿に火を放ったとき、かろうじて国記を火中から取り出し、後に近畿王朝と九州王朝の歴史を織り交ぜて近畿王朝の歴史を改竄するのに利用したと考えられる。日本書紀によれば、乙巳の変の後、安倍比羅夫が６４８年に蝦夷を征服したとなっている。６５４年、６５９年の唐への倭国の朝貢で、それぞれ、辺境の地の琥珀と瑪瑙、蝦夷人をもたらすことによって倭国が支配域を広げたことを見せかけたと考えられる。そして、白村江の戦いの前に、豊国と「邪靡堆国（やまとのくに）」の王族と遺産を近畿に移動させ、それぞれの国に役人と将軍を残留させたと考えられる。また、筑紫国には大宰府の都府楼で政務を執らせたと考えられる。６６３年に倭国は筑紫国の王・薩夜麻を立てて白村江の戦いで、唐と新羅の連合軍と戦って敗れた。倭国では、敗戦の報を受けて、筑紫国が政庁を朝倉宮に遷し、豊国と「邪靡堆国（やまとのくに）」が宮殿などの都の施設を焼き払って主力が近畿に逃げたと考えられる。唐の進駐軍が大宰府に入って都督府を構えて指揮をとり、抵抗する磐井の地を蹂躙し[79]、豊国と「邪靡堆国（やまとのくに）」を行軍し、反抗勢力がないことを確認したと考えられる。一方、近畿では、頭脳集団が入ったことによって、急激に国の改革が進められ、６６８年に天智天皇が立ち、６７２年に壬申の乱の後、天武天皇が立って、国が治まった。ここに至って、九州の天（あめの）王朝が近畿に入り込み、秦氏一族の念願の統一国ができたと考えられる。天（あめ）氏の大海人皇子が壬申の乱を起こして成功し、天武天皇となって古事記を太安万侶に、日本書紀を舎人親王に編纂を命じた。古事記を暗誦した稗田阿礼は豊国の現在の福岡県行橋市の稗田の出身と考えられる。また、倭王武の格調高い上表文に見られるように、漢文を使いこなせるのは豊国出身の官僚であったと考えられる。また、天皇の諡名は、弘文天皇（大友皇子）の曾孫の淡海三船が初代の神武天皇から４４代の元正天皇まで付けたのが始まりとされており[80]、経緯を伝え聞いた淡海三船は天智、天武の天は天（あめの）王朝、武は倭王の武に由来するとして諡号を付けたと考えられる。天武天皇が宗像の君・徳善の娘の尼子姫を妃にしたことも、豊国の出自であることを裏付けている[29]。

天武天皇は大海人皇子のときに中大兄皇子らと共に、大宰府の唐軍の都督と交渉し、白村江の戦いは近畿政権が無関係であることを認めさせ、後に６６８年滅亡する高句麗との戦いを急ぐ唐軍に撤退してもらったと考えられる。そして、天武天皇になって、新しい国号を日本（にっぽん）とし、九州の邪靡堆（やまと）出身の人をなだめて、近畿に大和（やまと）の地名を創らせ、倭（やまと）、大倭（おおやまと）などの命名を決めさせたと考えられる。そして、整合性を持たせるために、倭国で起こった遠征の事項を景行天皇と倭健、仲哀天皇、神功皇后、応神天皇などの説話に代え、磐井の乱、白村江の戦い、遣隋使などの改竄を行い、倭国王朝の神話などを織り込んで、古事記、日本書紀の編纂を命じたと考えられる。また、天武天皇が６８６年に亡くなるまでに、いわゆる大化の改新で暫定的な律令制を定め、７０１年の大宝律令の制定に繋げたと考えられる。僧や学生を唐に派遣する遣唐使は７０１年以後に始まったと考えられる。

旧唐書の元になった唐会要によれば、６７０年に初めて唐の高宗のときに朝貢して高句麗平定を祝賀し、以後朝貢を続け、６９０年からの則天武后のときに日本国の成立を報告している。そして、７０３年、７１３年、７７７年、８３９年の朝貢が記録されている。遣使の多くは尊大だったので中国は疑ったとなっており、九州王朝の外交の伝統を学んでいなかった近畿王朝系の官僚であったために作法をわきまえていなかった可能性がある。７１２年に古事記、７２０年に日本書紀が完成すると、７２０年以後の唐への朝貢の際に日本書紀を献上したと考えられる。

大宝律令によって、全国を郡（こほり）、郷（さと）で区分し、諸国に国府を置いて行った。その際、近畿の新王朝にとって都合の悪い、「吉野」、「大和」、「奈良」などの地名は地方に使わせず、新たに地名を与えたと考えられる。「邪靡堆国（やまとのくに）」に相当する国は７０１年に「日向国（ひゅうがのくに）」とし、７０２年に多禰（たね、種子島）の反乱を機に薩摩半島の部分を唱更国（７０４年までに薩麻国に）に分離し、さらに７１３年に肝坏郡、噌唹郡、大隅郡、姶羅郡をまとめて大隅国とした[59]。

5.4 隼人の国

大化の改新によって、公地公民、国郡、班田収授、租・庸・調などの制度が定められ、稲作に適さないシラスの土地に生きてきた九州南部の民は新制度に馴染めず、九州南部と西南諸島を視察に来た役人を威嚇した[26]。そこで、大和朝廷は九州南部に兵を送るとともに、前述の２国を設置し、７０４年に肥後国から、７１４年に豊前国からそれぞれ住民約５０００人を薩摩国府と大隅国府の領域に移し、農業を指導させた[26),27]。７１４年には、宇佐宮の辛島氏の一族も７０８年創建の国分平野の西の鹿児島神社に移り、東に韓国宇豆峯神社を建てた[81]。一方、庸の制度で代わりの布や米が収められない隼人は大和で労役に従い、朝廷の儀式で狗吠を発したという[26]。彼らが、魏志倭人伝で「狗奴

国」と記された国の人達の末裔であることを物語っている。これらの大和朝廷の施策は故地に置いてきた民に対する労りと憐れみの心配りがあるように感じられる。

隼人は７２０年２月に大隅国国司の陽候史麻呂を殺害し、朝廷は九州内で１万人以上の兵を集め、大伴旅人を大将軍、御笠室、巨勢真人を副将軍として征討にあたらせ[26]、宇佐宮の禰宜の辛島波豆米を従わせた[81]。隼人の乱である。隼人は数千人の兵で対抗し、曽於乃石城（そおのいわき）と比売之城（ひめのき）の２城の守りで耐えたが、７２１年６月に陥落した。この戦いで１４００人余りの隼人が殺され、隼人の地には供養塔が建てられ、参戦した宇佐の神軍は１００人の隼人の首を持ち帰り宇佐の地の塚に埋葬し、近くの百体社に隼人の霊を祀った[26]。この乱を逃れるために、日向国児湯郡の都萬神社付近の住民の一部が薩摩国鹿児島郡都萬郷に移住したと考えられる。大隅国姶羅郡の串伎の住民の一部も薩摩国日置郡合良郷付近、後の串木野に移住したと考えられる。あるいは、彼らは白村江の敗戦後、進駐軍を恐れて移住したかもしれない。

宇佐宮では神の御託宣により、隼人の霊を慰めるために７２２年に放生会が始まり、鹿児島神社も放生会を始めた。ここにおいても、遠い彼方の地から渡来した同胞でありながら、肥沃でない土地に住み着いた人達に対する秦氏の哀れみの情が伺える。

宇佐宮は７２５年に現在の小椋山に遷り、その後、神職に序列争いが起こり、奈良時代末期以降は大宮司が大神氏、少宮司が宇佐氏、禰宜は辛島氏に固定化した。一方、鹿児島神社は、平安時代末期に辛島氏に繋がる漆島氏が神官となって大隅正八幡宮を名乗り、宇佐八幡宮との間で本家争いが始まった。秦氏は宇佐氏とともに宇佐宮を築いてきたにも拘らず、大神氏から地位を奪われたことに対する憤怒の情と鹿児島神社の方が小椋山の宮より先に建てられた事実から、八幡宮の本家であることを主張したと考えられる。秦氏の一族は薩摩国高城郡の川内に新田神社という八幡宮を建て、惟宗氏が神職を務めた。

秦氏の一族である惟宗忠久は、鎌倉時代に源頼朝から日向国島津壮の地頭を任じられ島津氏を称することを許され、やがて薩摩国全域を統治し、島津氏の治世は江戸時代の終わりまで続くことになった[82]。秦氏の出自である鹿児島神宮の神官から、島津氏は倭国と日本国の歴史を学び、鹿児島神宮、霧島神宮などの庇護に当たったと考えられる。１５７７年に島津氏が伊東氏を破って佐土原城、都於郡城に入った[44), 83]のは狗奴国が因縁の邪馬壹国の首都に侵攻したかの感を覚える。関ヶ原の合戦で敵陣を突破した西軍の島津義弘は晩年を加治木の地で過ごし、その地に、１８６９年に島津義弘を祀る精矛（くわしほこ）神社が建てられ[84]、細戈千足国（くわしほこせだらしのくに）の出自の神武になぞらえ高千穂の峰に抱かれる国の勇者であることを讃えているかのようである。

九州南部の地には、古代フェニキア人やポリネシア人らの海洋民族や、その後、中国から苗族、呉の姫氏、徐福らの秦人、朝鮮半島、九州北部を南下した秦氏らが辿り着き[19), 34]、土着の人々に多くの血が混じり、火山地帯の独特の風土の上で、隼人を代表とする、勇猛かつ沈着な人々を生んできたと考えられる。熊襲伝説、邪馬壹国との抗争、そして隼人の乱、下って西南戦争、これらは輪廻のように繰り返され、一方では建国の尖峰の役を演じてきたのである。

6.　おわりに

アジアの東の果てにある日本列島を目指して南から西から北から渡来人がやってきて、太古から住んでいた人々の中に溶け込み美しく豊かな日本の国を作り上げた。その過程の中で人々の懸命な努力があり、抗争があって今日の姿になったのであるが、日本の古代は謎が多かった。古代の日本に関する中国の歴史書と日本の歴史書すなわち記紀が整合しないのは明らかに記紀を編纂した日本国の政権が都合の悪い倭国の歴史を隠ぺいしたからである。しかし、平安時代の日本国の百科事典である和名類聚抄、通称和名抄は官僚が忠実に記録した貴重な宝であった。

本研究では和名抄の郡、郷と魏志倭人伝の「くに」を突き合わせることによって、倭国の「くにぐに」を比定でき、特に邪馬壹国の都を西都原に比定し、卑弥呼の墓が男狭穂塚である可能性を強めた。魏志の著者の陳寿が司馬懿を意識して女王国を邪馬壹国と表記したと考え、倭国の強国の名前を組み合わせて和名を「くずまいつのくに」と推定した。また、狗奴国は現在の鹿児島県の領域に比定した。これらを足掛かり、隋書倭国伝で「やまと」の国は女王国の後継あること、秦王国は「豊国」であることが分かった。そして、宋書倭国伝で倭王武の上表文の「くに」から支配域が九州・山口から四国、淡路島までであることが分かった。豊国は崇める「やまと」の国を守る立場の国のようであったと思われる。また、中田力が推定した神武天皇の３世紀後半の即位年を足掛かりに、狗奴国から出発した神武が秦王国とその配下の秦氏の協力によって近畿王朝を開いたと考えた。旧唐書で倭国と日本国の記述が区別されていることから、豊国は朝鮮半島の情勢が危うくなった頃、倭国の支配を筑紫国に委ね、白村江の戦いで倭国の敗戦を機に壬申の乱によって近畿王朝

に「やまと」の国と共に入り、天王朝の天武天皇が豊国からの頭脳集団に命じて倭国の出来事をすべり込ませ改竄して記紀を編纂したと推定した。失われたユダヤの１０部族とされる秦氏を代表とする人々はアジアの東の果ての地に「やまと」すなわち「神の民」の国を創ったと思われる。

以上の考察と推論によって、従来、靄の中に在った倭国と日本国の繋がりが受け入れ易くなったと考えられる。

謝辞

書籍、ネットで著わした古代に関する多くの資料や解釈を参考にさせていただいた。特に、国立国会図書館のディジタルコレクション和名抄なしでは本研究は遂行できなかった。また、グーグル社の詳細な地図や航空写真を利用させていただいた。これらを公開して頂いた方々や機関に対して、多大の感謝をいたします。

参考文献

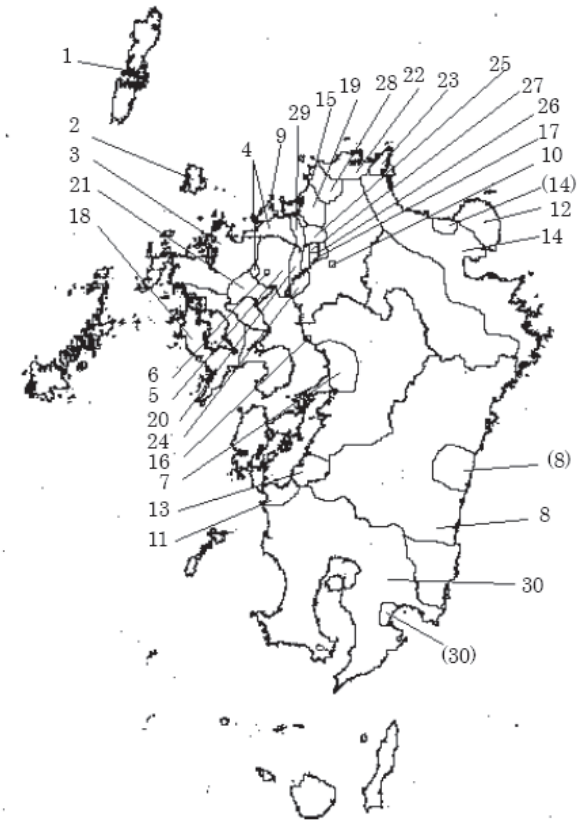
1)石原道博(編訳), 新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝, 岩波書店,1997.
2)伊藤整(編), 桑原武夫, 上田正昭, 横井清(訳), 日本の名著 15 新井白石　折りたく柴の記/古史通/古史通或問/読史余論, 中央公論社, 1969.
3)古田武彦,「邪馬台国」はなかった, ミネルヴァ書房,　2010.
4)国立国会図書館ディジタルコレクション-和名類聚抄 20 巻, http://dl.ndl.go.jp/info:ndlp/pid/2606770
5)植芝宏, 試作　万葉仮名一覧, http://www1.kcn.ne.jp/~uehiro08/contents/kana/1ran.htm
6)マイペディア, 日立システムアンドサービス・平凡社・平凡社地図出版, 2005.
7)内倉武久, 卑弥呼と神武が明かす古代, ミネルヴァ書房, 2007.
8)広辞苑, 岩波書店, 1998.
9)新漢語林, 大修館書店, 2004.
10)日本大百科全書, 小学館, 1984.
11)黄當時, 悲劇の好字, 不知火書房, 2013.
12)日本語源広辞典, ミネルヴァ書房, 2010.
13)大漢和辞典, 大修館書店, 1960.
14)足立倫行, 激変！日本古代史, 朝日新聞出版, 2010.
15)中田力, 日本古代史を科学する, PHP 研究所, 2012.
16)中原和人, 松重楊江, 失われた大和のユダヤ王国, たま出版, 2008.
17)嘉瀬川水路の変遷, http://www.saga-otakara.jp/search/detail.php?id=77
18)荒牧軍治, 干拓から有明海沿岸道路まで―有明粘土とのつき合い方―, NPO 法人有明海再生機構有明海講座, http://www.npo-ariake.jp/act-report/symposium/img/220120/220120ariakekouza.pdf
19)松重楊江, 倭人のルーツの謎を追う, たま出版, 2009.
20)深溝郷, 日本地名大辞典　佐賀県, 角川書店, 1982..
21)総論, 日本歴史地名体系 44 熊本県の地名, 平凡社, 1985.
22)當麻郷, 日本地名大辞典　熊本県, 角川書店, 1987.
23)山田昌行, 邪馬台国・日向への道, 鉱脈社, 2007.
24)古田武彦, 盗まれた神話, ミネルヴァ書房, 2010.
25)グーグル地図, http://www.google.co.jp/maps/mm
26)伊地知南ほか, 曾の隼人, 霧島郷土史研究会, 2014.
27)中村明蔵, 古代隼人の生きざまをふりかえる一隼人国成立から 1300 年一, シターンきりしま, Vol.161, pp.18-21, 2013.
28)古田武彦, 俾弥呼, ミネルヴァ書房, 2011.
29)砂川恵伸, 天武天皇と九州王朝, 新泉社, 2006.
30)「ムナカタ国」はあった？, 読売新聞西部版 10 月 27 日号, 2014.
31)藤原新也, 安部龍太郎, 神の島　沖ノ島, 小学館, 2013.
32)郡の変遷（九州地方）, http://www.tt.rim.or.jp/~ishato/tiri/gun/g-kyushu.htm
33)坂田安弘, 読み解き　古事記, 産経新聞出版, 2008..
34)内倉武久, 太宰府は日本の首都だった, ミネルヴァ書房, 2000.
35)九州古代遺跡ガイド, メイツ出版,2009.
36)古田武彦, 人麿の運命, ミネルヴァ書房, 2012.
37)松重楊江, 日本神話と古代史の真実, たま出版, 2010.
38)豊前国の延喜式内社　宇佐八幡について, http://kamnavi.jp/log/ugahatiman.htm
39)日本とユダヤのハーモニー, http://www.historyjp.com/ArticleList.asp?bu=22
40)葛, 精選中国地名辞典, 凌雲出版, 1983.
41)ヨセフ・アイデルバーグ, 大和民族はユダヤ人だった, たま出版, 2009.
42)秦, 姓氏, 秋田書店, 1970.
43)橋口学, 完読「魏志倭人伝」, 高城書房, 2010.
44)都於郡城, 日本地名大辞典 宮崎県, 角川書店, 1991.
45)松重楊江, 卑弥呼王朝の全貌, たま出版, 2011.
46)西都, 角川日本地名大辞典, 宮崎県 角川書店, 1991.
47)柳沢一男, 北郷泰道, 竹中克繁, 東憲章, 生目古墳群と日向古代史, 鉱脈社, 2011.
48)小林城, 角川日本地名大辞典 宮崎県 角川書店, 1991.
49)首長墓？武具など 400 点, 読売新聞西部版, 1 月 20 日号, 2015.
50)「島内地下式横穴墓第 139 号」現地説明会資料, http://www.city.ebino.lg.jp/display.php?cont=150120095059
51)日本語とヘブライ語, http://blogs.yahoo.co.jp/timothy3005/3457859.html
52)金容雲,日本語の正体,三五館, 2009.
53)中村明蔵, 隼人の生きざまをふりかえる一隼人国成立から 1300 年一, モシターンきりしま, Vol.162, pp.15-18, 2013.
54)小田富士雄, 九州考古学散歩, 学生社, 2000.
55)中村明蔵, 隼人異聞く物語―プレ隼人篇（その二）ー, モシターンきりしま, Vol.169, pp.17-20, 2014.
56)河野俊章, 予言　大隅邪馬台国, 牧歌社, 2008.
57)中村明蔵, 隼人異聞く物語―川筋をたどる（その一、肝属川）ー,モシターンきりしま, Vol.174, pp.17-20, 2014.
58)内倉武久, 熊襲は列島を席巻していた, ミネルヴァ書房, 2013.
59)日向国, 日本歴史地名体系 46　宮崎県の地名, 平凡社, 1997.
60)大崎町, https://www.town.kagoshima-osaki.lg.jp/
61)大隅河川国道事務所, 舟運の歴史, http://www.qrs.milt.go.jp/osumi/river/rekishi/rekishi-syuun.htm
62)日本書紀　巻第三　神日本磐余彦天皇　神武天皇, http://www.j-texts.com/jodai/shoki3.html
63)倭健, 新訳　倭人伝（改）, 文芸社, 2010.
64)霧島神宮, http://www.pmiyazaki.com/kirishimajingu/index.htm
65)岡田宮, http://www.okadagu.jp/
66)高乃宮神社, http://yutaka901.fc2web.com/page5dpx04.html
67)角重始, 中世地域経済の発展と広島湾頭―祇園を中心として―, harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/h-bunkyo/file/3072/20090126052718/inyoji(kados...
68)草津八幡宮, http://kusatsu189.com/
69)備前国総社宮, http://www.geocities.jp/bizenksoja/
70)備前総社宮, http://www.city-okayama.ed.jp/~takashims/old/siseki/1_soujya/soujaguu1.htm

71)宋書倭国伝,
http://classic.music.cooan.jp/_book/furuta/soujo.htm
72)小豆島町, 歴史,
http://www.town.shodoshima.lg.jp/about/history.html
73)白村江の戦い, 国史大辞典 11, 吉川弘文館, 1990.
74)旧唐書/巻 199 上,
http://zh.wikisource.org/wiki/%E8%88%8A%E5%94%90%E6%9B%B8%E5%8D%....
75)「唐会要」倭国・日本国伝,
http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kanbun/wakoku-kanbun12-tokaiyo.htm
76)乙巳の変―蘇我氏本宗の滅亡, 読める年表・日本史, 自由国民社, 1996.
77)倭国と日本国,
http://www2.ocn.ne.jp/~syouji/kodaisi_16.html
78)古田武彦, 壬申大乱, ミネルヴァ書房, 2012.
79)古田武彦, 「磐井の乱」はなかった,
http://www.furutasigaku.jp/jfuruta/sinjitu8/noiwai.html
80)淡海三船, 日本人名大辞典 1, 平凡社, 1984.
81)宇佐氏考,
http://www17.ocn.ne.jp/~kanada/1234-7-32.html
82)島津氏の家系,
http://www2.harimaya.com/simazu/html/sm_kakei.html
83)末永和孝, 佐土原城, 鉱脈社, 2011.
84)精矛神社, 鹿児島県神社庁
http://www.kagojinjacho.or.jp/search/airaisa/aira/post-384.html

付録　倭国のくにぐにの位置

魏志倭人伝に記された倭国のくにぐには朝鮮半島の釜山付近の狗邪韓国を除いて九州島近辺に収まる。魏志倭人伝の国名は次のように番号を付して付図１の地図上に示す。対応する和名抄の国の郡（こほり）、郷（さと）およびそれらの現在の位置は本文中に記してある。首都は(・)番号を付し、和名抄の郡からの仮称を記した。

1 対海国　かしのくに、いなのくに
2 一大国　いきのくに、いしだのくに
3 末盧国　まつらのくに
4 伊都国　いつのくに
5 奴国　なかのくに
6 不弥国　ふかみぞのくに
7 投馬国　たうまのくに
8 邪馬壹国　くずまいつのくに
(8) 邪馬壹国首都　(こゆのくに)
9 斯馬国　しまのくに
10 巳百支国　しばかりのくに
11 伊邪国　いずみのくに
12 郡支国　くにさきのくに
13 弥奴国　みなまたのくに
14 好古都国　からくにくずのくに
(14) 好古都国首都　（うさのくに）
15 不呼国　ふかたのくに
16 姐奴国　さののくに
17 対蘇国　とすのくに
18 蘇奴国　そのぎのくに
19 呼邑国　かすやのくに
20 華奴蘇奴国　かんざきよしののくに
21 鬼国　きしまのくに
22 為吾国　おんがのくに
23 鬼奴国　きくながののくに
24 邪馬国　みずまのくに
25 躬臣国　みくゎさのくに
26 巴利国　みはらのくに
27 支惟国　きいのくに
28 烏奴国　むなかたのくに
29 奴国　なかのくに
30 狗奴国　くしきぬらのくに
(30) 狗奴国首都　（あひらのくに）



付図１　倭国のくにぐにの位置